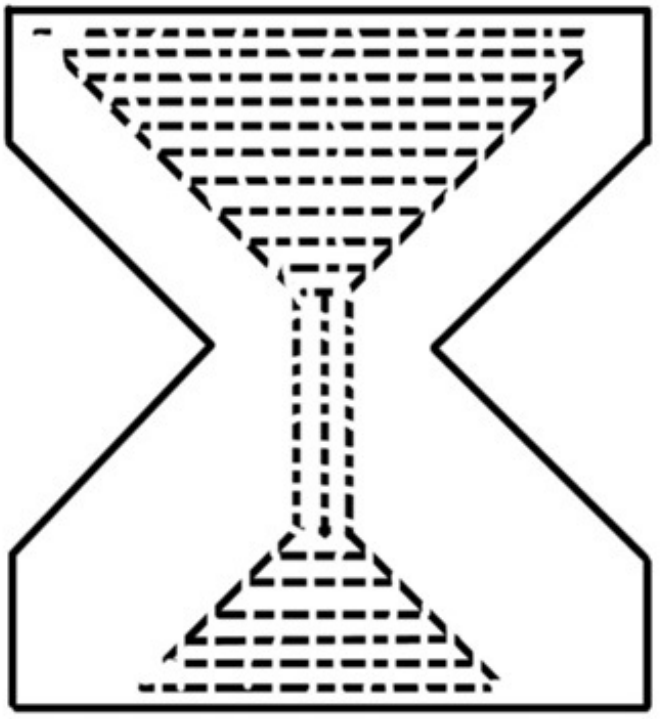
AIR MAIL

2012年文化祭号



中学文藝部誌

筑波大学付属駒場中・高等学校
文藝部誌

Vol.23

はしがき（前書き）

はしがき

　個人的なことで恐縮ですが、はやいものでこの学校にはいって三度目の文化祭をむかえました。もうすぐ中学卒業ということになります。この国においても中学校を卒業すれば社会人になるという方はなかなか大勢いるものですが、自分と比較すると尊敬の念を禁じ得ません。同級生の成長もあいまって、己の未熟さ、幼稚さをあらためて感じる今日この頃です。
　もちろん、どんな学生にも自分を成長させる機会は転がっています。しかしそれを拾えない、拾おうとしない学生もすくなからずいると思います。少なくとも僕はそうなってしまっているのです。そのような学生に、言葉は悪いですがいわば強制的に成長の機会を拾わせる。それが文化祭をはじめとした行事なのではないか、と三度目にしてようやく気がつき始めました。
　今年の文化祭で僕はどのくらい成長できた（できなかった）のか。作品の出来を見ると少々不安になりますが、それでもためらわずに掲載できる、自分にできる限りのことはしたという思いはあります。その判断は来場者の皆様にゆだねましょう。

　本当に自分のことばかりですみません。個人的な目標や思いはどうあれ、始まった文化祭ではやはり来場者の皆様に楽しんでいただくことが第一です。はしがきはすこし堅苦しくなってしまいましたが、掲載している作品は、その目的を果たすために、部員一同が面白く親しみやすいものをめざして書き上げたものです。中学生の頃を懐かしみながら、あたたかく見守っていただけると幸いです。そしてもし面白いと感じていただけたなら、これに勝る喜びはありません。
　それではどうぞ本誌をお楽しみください。
　お手に取っていただき、誠に有難うございました。

やくると

雨ニモマケズ・二十億光年の孤独（詩）

雨ニモマケズ・二十億光年の孤独　　やくると

〈人類は小さな球の上で〉
「雨にも負けず　風にも負けず」
「雪にも夏の暑さにも負けぬ　丈夫なからだをもち」
〈眠り起きそして働き〉
〈ときどき火星に仲間を欲しがったりする〉
〈火星人は小さな球の上で　何をしてるか〉
「慾はなく　決して怒らず」
「いつも静かに笑っている」
〈（或は）〉「一日に玄米四合と　味噌と少しの野菜を」
〈ネリリし　キルルし　ハララし〉「食べ」〈（ているか）〉
「あらゆる」
〈僕は知らない〉「ことを　自分を勘定に入れずに」
「よく見聞きし分かり　そして忘れず」
〈しかしときどき〉「野原の松の林の陰の」
「小さな萱ぶきの小屋にいて」
〈地球に仲間を欲しがったりする〉
「東に病気の子供あれば　行って看病してやり」
「西に疲れた母あれば」
「行ってその稲の束をおい」〈もとめ合う〉
「南に死にそうな人あれば」
「行ってこわがらなくてもいいといい」
〈それ故みんなは不安である〉
「北に喧嘩や訴訟があれば」
〈宇宙はどんどん膨らんでゆく〉「からやめろといい」
「つまらない」〈宇宙は〉「日照りの時は」〈ひずんでいる〉
〈万有引力とは〉「涙を流し」〈ひき合う孤独の力である〉
「寒さの夏は」〈思わずくしゃみをした〉〈僕は〉
「おろおろ歩き　みんなにでくのぼーと呼ばれ」
〈それはまったくたしかなことだ〉
〈それ故みんなは〉「褒められもせず」
「そういうものに」「苦にもされず」
〈二十億光年の孤独に〉「わたしは　なりたい」

（注）

　これは題名の通り、
「雨ニモマケズ」（宮沢賢治）
〈二十億光年の孤独〉（谷川俊太郎）
の二つの作品を切り貼りしたものです。しばしば順番が変わっています。

最高の一生（小説）

最高の一生　せいやとおる

～～～Ⅰ～～～

僕の人生、特に悪いことも無いが、特に良いことも無かった。外見はいたって標準的だし、運動や勉強も平均の前後。算数は得意だったが数学はちんぷんかんぷんで、クラスの問題児ではなかったが決して人気者でもない。就職の時だって、三次志望レベルの企業に運よく入れたぐらいだ。だから、自分の人生が最高の人生だと思ったことなど一度さえない。
今日も上司に褒められたり怒られたりの会社を終え、西日暮里駅から十五分の自宅アパートに向かっていた。そんなときである。道の端に光る何かが落ちているのを見つけたのだ。なんだろうと思って拾ってみるとそれは、「アラジンと魔法のランプ」に出てきそうな魔法のランプだった。

～～～Ⅱ～～～

家に帰ってランプをこすってみると、もくもくと白い煙が出てきた。
「わ～。おじいちゃんになっちゃうよ～。……あれ、なってない。」
目を開いて部屋を見渡すと、そこにはインド人風の魔人が立っていた。立っていた、といっても足は無い。僕が呆然としていると、
「お呼びでしょうかぁ、ご主人さまぁ。」
独特なイントネーションで話しかけてきた。
「私があなたの願いを三つだけ叶えてさしあげるのでーす。感謝しなさいなのでーす。」
「何だって。じゃあ……、願いが無限に叶うようにしてくれ！」
すると、魔人の顔がいきなり怒った表情に変わった。
「ふざけるなぁ。そういう屁理屈を言う人私嫌いでーす。もうあなたをボコボコにしちゃいますよぉ。チチンプクプ……」
魔人が呪文を唱え始めた。
「うわぁ！やめてくれ！」
「かしこまりました！一つ目の願い、叶えてあげまーす。」
そう言って魔人は呪文を唱えるのを、やめてくれた、のだった。

～～～Ⅲ～～～

その後、僕は発言に注意しながら二つ目の願いを考えた。
宝くじに当たる？いや、どうせすぐにお金を使いきってしまう。
美人と結婚する？でも貧乏じゃいやだな。
やっぱりあんまり具体的なのはやめよう。……そうだ！。
「僕の人生を最高の人生にしてくれ。」
「かしこまりました！二つ目の願い、叶えてあげまーす。チチンプクプク、最高の人生になれ！」
すると、魔人の口から白い煙がもくもく出てきた。

「わ～。おじいちゃんになっちゃうよ～。……あれ、なってない。」
　目を開いて部屋を見渡すと、魔人がいなくなっていた。しかし、僕のからだに変化は無い。残ったランプをこすってみても、何も起こらない。釈然としないまま、僕は寝ることにしたのだった。
　次の日に会社に行くと、上司にとても褒められた。どうやら、僕の出した企画が大成功したらしい。
　その後も、僕はどんどん仕事がうまくいき、どんどん偉くなっていった。宝くじの賞金以上のお金を手に入れ、あり得ないほどの美人と付き合い始めた。そして自分の会社を立ち上げ、日本では知らない人がいない程の会社にした。テレビの情熱大陸でも特集された。
　そして、みんなは口をそろえて僕に行った。
「あなたの人生は最高の人生だよ！」
　　～～～Ⅳ～～～
　五十年後、今日も部下を褒めたり怒ったりの会社を終え、代官山の高級マンションに着いた。インターネットをしていると、ふとあのランプを思い出した。あれは金庫にしまってある。
　地下室の金庫からランプを出しこすってみると、もくもくと白い煙が出てきた。
「わ～。おじいちゃんになっちゃうよ～。……って、もともとおじいちゃんか。」
「お久ーしぶりでーす。ご主人さまぁ。」
　魔人の姿は変わらず、インド人風であった。
「今日は、君に三つ目の願いを叶えて欲しいんだ。願いは、もう一回最高の人生を楽しみたい、だ。私はもう老人だ。若い頃に戻らせて欲しいんだ。」
「かしこまりました！三つ目の願い、叶えてあげまーす。つまり、あなたが生まれ変わって、もう一度あなたに生まれるようにしてあげまーす。だからまずあなたが死んでくださーい。」
　魔人は、いきなり拳銃をだして私を撃った。
　思い出した。これで一五六七回目だ……。
　　～～～Ⅴ～～～
彼は、このあと再び彼として生まれ、良くも悪くもない期間を過ごした後、ある日魔法のランプを拾う。そして魔人に願いを叶えてもらい、最高の人生を送る。五十年後、彼は魔人に殺される。
それを、彼は永遠に繰り返すのだった。
彼の最初の願い、
「願いが無限に叶うようにしてくれ！」
を魔人が叶えた結果である。

パン・ヒーロー（詩）

　パン　智喜　冨和

たとえそれが
血に浸されたパンだとしても

家族と食えば美味いだろう

たとえそれが
汗に浸されたパンだとしても

仲間と食えば美味いだろう

たとえそれが
出来立てのパンだとしても

一人で食えば不味いだろう

一人で食えば不味いだろう

　ヒーロー　　智喜　冨和

助けて
助けて

ありがとう
ありがとう

口を揃えてみんなは言う

君がいなけりゃ
大変だ

君がいるから
安心だ

心の中で僕は言う

助けて
助けて

でも
誰も気づかない

でも
誰も助けない

誰も彼を救えない

あなたはだぁれ？（小説）

　あなたはだぁれ？　ＹＵＫＩ

　学校から帰るといつも通り母さんが迎えてくれた。いつもと何か感じが違うような…まあ気のせいか。そう思った僕は「ただいま」と言って自室に向かった。――このとき気付いていればこんな事にはならなかったのに…。
　僕は中学２年生。東京で姉と両親と暮らしている。父は某有名銀行の執行部に勤めていて、僕が言うのも何だが超お金持ちだ。家には金塊を隠していると昔父さんが言っていたけどさすがに冗談だろう。家は４階建てでプールとテニスコート付きだ。昔強盗に入られそうになったことがあるらしく警備は厳重で至る所に監視カメラがある。僕はまだ中学生と言うことでボディーガードまで着いていて学校の行き帰りなど外出時にはいつもついてくる。だから友達と遊ぶことも中々出来ないんだ。姉さんはもう大学生だからボディーガードも外れて毎日のように遊んでいるみたいだ。僕も早く大人になってもっと遊びたいな…。
　なんて考えながら宿題をしていると姉さんが帰った音がした。玄関でなにやら母さんと小声で話している。しばらくすると階段を上ってくる音がして、姉さんが顔を出した。
「何か母さんいつもと違わない？」
そう言ってきた。姉さんも気付いたか。
「うん…。なんでだろう？」
「さっき玄関で今日は中学の〇〇さんと遊んでたって言ったんだけどその人のこと全然覚えていないみたいだったのよ。もしかして記憶喪失…？なんてまさかね。」そう言うと笑って出て行った。
　記憶喪失か…まさかな。そう思っていると母さんが夕飯に呼んできた。
　食べながら、母さんに「僕が４歳の時、間違えて家の窓割っちゃったときのこと覚えてる？」と聞いてみた。
「え？あぁうん　も――もちろん覚えてるわよ。」
「警報が鳴って警備会社の人が来ちゃって大変だったよね。」
「そうそう。そうだったわね。」
！！！　警報は鳴ったけどすぐに父さんが連絡したから警備会社の人は来なかったのに…。今日の母さんは、外見は母さんでも中身は全然違う人みたいだ…。昨日まではいつも通りだったのに。
「今日どこかに行った？」そう聞いてみると
「どこにも行ってないわ。今日はずっと家にいたの。」
夕食のあと僕の部屋に又姉さんが来た。
「さっき母さん今日はずっと家にいたって言ってたけど今日母さんらしい人見た気がするの。新宿で友達と遊んでたら母さんを見た気がして追いかけたんだけど、見失っちゃった。」
「つまり母さんは新宿に行って何かをしたけどそれを隠してるって事？」
「うん。きっとそうよ。それが今日の違和感の原因なのかも。」

そうか。それなら辻褄が合う。それなら…。
「じゃあ今から新宿の姉さんが母さんを見た場所に行ってみない？裏口から行けば母さんにも僕のボディーガードにもばれないよ。」
「えー今から？父さん帰って来ちゃうんじゃないの？」
「何言ってんの。父さんは明後日まで出張だから帰ってこないよ。」
「あっ　そうだったわね。じゃあ行こうか。」
　身支度を調えた僕たちは裏口から出て新宿に向かった。新宿駅から少し歩いたとき姉さんが立ち止まり
「確かこの辺よ。母さんを見たのは。」と言った。
そこは大通りから一本入った細い路地で、古そうなビルが建ち並んでいる。
「この辺のビルに入ったのかなぁ？」
「そうかもね。ちょっと調べてみようか。じゃあ私はこっち側のビルを調べるからあっち側はよろしく。」そう言うと姉さんは道路の右側に建ち並ぶビルに向かっていった。
　僕も左側のビルを一番近い方から調べることにした。１番目２番目には何のテナントも入っていなかった。３番目には『催眠療法部屋』と書かれている。まさか母さん催眠術で…と思ったその時後ろから急にハンカチが口に当てられ目の前が真っ暗になった。一瞬姉さんの顔が見えたような……。
　目が覚めると僕はベッドに寝かされていた。一瞬夜のことは全部夢で自分の寝室にいるのかと思ったが違うみたいだ。窓からは光が差し込んでいる。もう朝みたいだ。
　でも窓には鉄格子がしてあるし窓の反対側も一面鉄格子で覆われている。部屋にはベッドとトイレがあるだけ。まるでテレビで見る刑務所みたいだ。
　しばらくすると突然男の声がした。見ると鉄格子の後ろに一人の男が立っている。
「おまえは誰だ？ここは何処だ？」そう聞くと
「ここは君が入ったビルの一室。私は…そうですねルパン４世とでもしておきましょう。私は世紀の大泥棒です。」
　？？？誰だこのナルシストは？だいたい泥棒がなんで僕に…あ！
「ねらいはもしかして父さんか？計画って何だ。」
「私の狙いは貴方の父親の持っている金塊です。私は２０年前にも金塊を盗もうとしましたが失敗し捕まってしまった。このリベンジのために私は刑務所でずっと計画を練っていたのです。」
「じゃあ金塊の話やそれを盗もうとしたこそ泥がいるって話は本当だったのか。」
「私は世紀の大泥棒。こそ泥ではない！！まあ良いでしょう。もうすぐ金塊が来るはずだ。それまで私の素晴らしい計画を聞かせてあげましょう。」そういうと男は忽然と語り出した。
「２０年前の私の計画は完璧なはずでした。執事の一人として屋敷に入り込み隠しカメラと盗聴器を至る所に設置し金塊の隠し場所を突き止めました。それは意外にも貴方のお母様の寝室の床下にあるのですよ。そのことはお母様も知らないようでしたが。別に金庫に入っているわけでもなければ警備員がいるわけでもない。ただ床の正しい位置を押せば良いだけだったのです。こんな簡単なことはない。そう思った私はご両親がパーティーに行っていて自宅にいない日に寝室に忍び込み金塊を盗むことに成功しました。あとは逃げるだけでした。そのとき突然赤ちゃんの泣

き声がして子守役らしき人が部屋に入ってきたのです。その赤ちゃんが貴方のお姉さんです。いつもはお父様の部屋で寝ているはずなのにその日に限ってお母様の寝室で寝ていました。不覚にも私は部屋に入る時その存在に気付かなかった…。手に金塊を持っていた私は子守役に通報され捕まってしまった…」
「それから２０年、私は牢獄の中でずっとリベンジの計画を練っていました。そしてついにその計画を実行することが出来ました。牢獄に入れられた私はまず何がいけなかったのか考えました。そして気付いた。もし金塊を持っていたのが私ではなくお父様かお母様だったら…何も怪しまれなかったはずです。だが貴方の家族に金塊を盗んで欲しいと言っても聞いてはくれないでしょう。だから私は貴方の『家族』を自分で作り上げることにしたのです。」
　そう言うと男は不敵に笑った。僕の家族を作り上げる？どういう意味だ？
「私は牢を出るとまず貴方のお母様とお姉様に背格好が似ている女性を二人誘拐し整形を施して全身をそっくりにしました。その一方で私は清掃係として屋敷に忍び込み貴方のお母様を誘拐し、友達と別れ家に帰る途中のお姉様も誘拐しました。そして整形した２人に催眠術で『金塊を盗んで私の所へ持ってこい。息子も連れてこい。』と暗示をかけ、屋敷に送り出しました。そう、今日貴方があったお母様とお姉様はわたしの作り上げた偽物なのです。そして暗示通り貴方をここまで連れてきた。もうすぐ金塊も来ることでしょう。はははははははもう失敗はしません。」
だから今日の母さんはどこか違ったのか。でも姉さんまで偽物だったなんて…。
「今本物の姉さんと母さんは何処にいるんだ？」
「このビルにいますよ。違う部屋に。」
「僕たちをどうするつもりだ？」
「催眠術をかけ、ここでの記憶を消して戻してあげます。殺しても良いのですが私は無駄な殺生はしない主義なので。」
「整形した偽物２人は？」
「その二人は残念ながら殺さなければいけませんねぇ。まあ元々ホームレスの中から誘拐してきたので誰も気づきもしないでしょう。」
「そんな…何故そこまでして金塊を…他にも大金を手にする手段はあるだろう。銀行強盗とか…」
「貴方にはロマンというものがわからないようだ。銀行強盗なんて簡単なことをやってもつまらないでしょう。それに私は狙った獲物は絶対に逃さない！！お宝とはかけがえのないものなのです。」
　やはりこいつ気が狂ってる。ロマンでこんな事をするなんて…でも自分のことを天才だと思っているようだが意外とそうでもないぞ。僕が携帯を持ってることに気付かないんだから。すきをみて警察に通報すれば…。
　その時下の方から音が聞こえ、しばらくすると金塊を持った（偽物の）姉さんと母さんが現れた。
　それを見た男は
「ご苦労だった。君たちにもう用はない。」

そう言うとどこからともなく振り子のようなものを取り出し、「ねむくなーるねむくなーる…」と言った。そんなんで本当に眠くなるわけ…と思っていると本当に二人は崩れ落ちて眠ってしまった。この男以外とすごいのかもしれない。男はこちらを向くと
「あとは２人を海にでも沈めてあなたたちに催眠術をかけ金塊を持って逃げるだけです。とりあえずこの二人を車に入れておきますか。」
と言うと眠る２人を持ち上げ部屋を出て行った。今がチャンス！！そう思って僕は携帯を取り出すと早速警察に電話した。……あれ？繋がらない…あ！ここ圏外だ…牢獄の中を移動してみたが何処も圏外。僕の唯一の望みは途絶えた…。
　僕がうなだれていると男が戻ってきて
「では催眠術を始めましょう。」さっきの振り子を取り出して「ぜんぶわすれーるねむくなーる」と言いだした。僕は必死に振り子を見ないようにしたが目が振り子に吸い寄せられてしまう。そしてだんだん眠くなってきた…。

　目が覚めると僕はベッドに寝ていた。窓からは光が差し込んでいる。昨日学校から帰ったあとすぐに寝てしまったようだ。着替えて階段を下りるともう朝食の用意は出来ていた。姉さんと母さんが待っている。父さんは明日まで出張だ。
　次の日の夜、父さんが帰ってきた。僕はもう寝るところだったので「おかえりなさい」と言って寝室に向かった。しばらくして僕がうつらうつらしていると突然父さんの叫び声が聞こえてきた。何事かと思い声のした方へ向かうと、母さんの寝室から父さんが出てきた。
「どうしたの？何かあったの？」
「金塊がない。金塊が無くなったんだ。」
「金塊？父さん本当に金塊を持ってたの！？」
「ああ。母さんの寝室に隠してたんだが今見たら無くなっていて替わりにこんなのが…。」
そう言って父さんが取り出したのは一枚のカードだった。カードには
『*金塊は頂きました*　　ＬＵＰＩＮⅣ』と書かれている。ルパン４世…どこかで聞いたような…。
　僕の耳には男の高笑いが聞こえてくるようだった。

灯・未知の道（詩）

灯　Ａｋａｒｉ　ＩＮＧＡ

ドアを開け窓を開け
明るい灯が差し込む
明日へと未来へと
そよ風に乗って突き進む

ただ大地が広がっているだけの
自然にできたなにげない空白で
絶望の窮地に立たされ
もどかしさと言う感情が生まれる
そんな中未来への希望の光が
絶望を希望に変える
そんな中透き通っているそよ風が
もどかしさを吹き飛ばす

未来への道が拓かれて
道のりは長くても
夢への架け橋がつるされ
架け橋が揺れてても
空への階段現れて
階段が急でも
一歩一歩進んでいく
その先には笑顔がある
歩みきり渡りきり昇りきり
喜びの胸騒ぎを感じる

ドアを開け窓を開け
明るい灯が差し込む
明日へと未来へと
そよ風に乗って突き進む

未知の道　ＩＮＧＡ

未知の道を
ゴールはなくとも太陽に向かって
希望に満ち溢れながら
そよ風になびかれながら
足音響かせながら
砂埃舞い上げながら
走り抜けろ

生きる道は未知の世界
己の視界には入らない
湧きあがる性と光求め
拓かれた未知の道を
遠回りしても確実に
一歩一歩踏み外さずに
たまの寄り道も忘れずに
ゴールはなくとも太陽に向かって
希望に満ち溢れながら
そよ風になびかれながら
足音響かせながら
砂埃舞い上げながら
走り抜けろ

神が創造した今の世界を打ち砕き
新たな世界をレンガを積み上げ
自由という名の運命を作り
己の力で創造する
何回転んでも
くじけて立ち直れなくても
とにかく前へ前へと
走り抜けろ

時や人は常々変わっている
一分一秒どの瞬間も
希望に満ち溢れているが
同じ瞬間は一度たりともない
けれど同じものはある
時は経ち友達との深まった

ゆるぎない絆と心の傷跡
そして輝く瞬く辛く
楽しかった思い出

未知の道を
ゴールはなくとも太陽に向かって
希望に満ち溢れながら
そよ風になびかれながら
足音響かせながら
砂埃舞い上げながら
走り抜けろ

悪魔（小説）

悪魔　やくると

「どうかお許しください。見ず知らずのものがいきなり話しかけたりしまして……」男が言った。
　窓の外の暗闇を眺めていた私が目を転じると、シルクハットにタキシードの男が向かいの席に腰かけていた。わざとらしい慇懃な口調と服装があいまって、ふざけているように思われた。顔にはいたずらっぽい笑みが浮かんでいる。
　白い壁の殺風景な部屋。私と男は、そのまんなかにある黒い木製の机を挟んで置かれた二つの椅子にそれぞれ座っていた。さきほどまで私がいたはずの部屋とはどうみても違う場所だ。
　こちらがどのように反応するか、面白がって待ち構えているような男の目に、これはこの男の仕業だな、と直感する。
「それなら名乗ればいいんじゃないかな」と返すと、男は「や、これはこれは。ちょうど今言おうとしていたところなんですよ、自己紹介させて下さいってね。もっとも名前は言えませんが――常に悪を欲し常に善をなす、これはちょっと私には大仰にすぎますな。小物にふさわしく、財産家で趣味は良い、とでも自慢しておきましょうか」と手元のステッキをくるりとまわしながら言った。
「まあ趣味がいい男なら結構いますが、私ほどの金持ちは他にいないでしょうよ。たとえばこのステッキなど、あの十字架に使われた木でできたものなのですよ。こんなのは序の口です。まったく私に買えないのは貧困ぐらいだってね――」
　自分の財産家ぶりを自慢しているにもかかわらず、そこに尊大さや強欲さは感じられず、ただただ愉快げに、まるで喜劇を観客が面白がるような調子で話すので、低俗な感じはしなかった。趣味がいい、というのはどうやら嘘でもないらしい。気づかぬうちに見知らぬ場所に連れてこられた後とあって、男に何らかの力が具わっているのではと思いはじめた私には、魂や信仰といった言葉も全くのほら話には聞こえなかった。
「ああ、こんなことをしている場合ではないかな。あなたが欲しているのはこいつでしたね」
　そう言うと同時に男はふわりとシルクハットをとった。微風に男の髪がゆれる……。いや、揺れているのは世界の方だ。全てがゆがみ、ねじ曲がり、ダリの時計のようになっていく中で、男だけが超然としている。

　だれかがこの部屋を覗きこんでいる気がした。窓の前に立つが、外には闇が広がっているばかりで何も見えない。窓枠に手を置いたところで男が話しかけてきた。
「『宇宙の缶詰』は知っているでしょう？　あれは缶詰の内と外を反転させたものでしたが、その伝でいけば、これはふたの開いた缶詰に相当します。缶詰のふたを開けると、缶詰の内と外がひとつながりになります。こうなってしまえば、あとは全てを缶詰の内側にしてしまうことだって簡単にできるのですよ」

「つまりさっきは、そのシルクハットの中に世界が閉じ込められたということなのかな」と尋ねると、男は満足げにうなずいた。「正確にはこのシルクハットではありませんがね。いま私の頭の上に置かれているのは、大きな私のもつシルクハットの中のこの世界にいる私がかぶったシルクハットでしかありません」
　だとすると、覗いていたのはこの男、あるいは私自身なのだろうか。
　窓から離れ、椅子に座る。電燈がジリジリと微かに音をたてて明滅している。いま私たちがいる部屋は、さきほどの部屋と同じに見える。ただ、電燈がまたたいているために若干暗く感じられる。私と向き合っている男もさきほどの男と同じに見える。話を聞く限りでは別人のようでもあるのだが。
「それでは始めましょうか」と男が言うと同時に、上からはらはらとトランプが落ちてくる。
　机の上に積もったカードをかき集めると、男は上から一枚ずつ引いていく。「三、七、一、スペードの女王――こいつはいけない――いやなに、別に今からやることとは関係ないのですがね、まじないのようなものですよ」といいながらカードを山に戻し、ステッキで一番上をコンコンとたたく。「さあ、カードをお取りなさい。五枚ですよ」
　手を伸ばし、山からカードをとる。一枚目のカードを目にして、私はめまいに襲われた。ジョーカーのカードに描かれた、シルクハットにタキシードの男。笑みを浮かべた男の絵は、目の前に座る男に生き写しだ。
　絵の中の男が右手に持ったシルクハットに、全てが吸い込まれていく。

　自分に何が起こったのかは、缶詰の話で理解できたと思う。自分が大きくなったのか小さくなったのか、それが分からなかった。それとも大きさは変わっていないのか。シルクハットの方が大きくなったのだろうか。
「やあ、いずれであろうとたいした違いはないでしょうに。アリスみたいにケーキか瓶か、区別しなきゃいけないんなら別ですがね」
　窓の留め金をいじる手を止めて振り返ると、うしろに男が立っていた。留め金に視線をもどし、「あなたは何がしたいんだ」と尋ねる。
「私はなにも欲していませんよ。欲しているのはあなたです」男が楽しそうな声で言う。
「何を言っているのか分からないんだ。私はこんなことは望んでいない。あなたが現われることも望んだつもりはない。いや、そもそも私は何かを望んでいたのかな？」
　窓の留め金がはずれた。私は男に言う。「とりあえず、私はここから出してもらうよ。この部屋の外もあなたの箱庭かもしれないが、そうではないかもしれない」
　一気に窓を押し開く。
　私はそこから動けなくなる。
　男が悠然と微笑んだ。
　窓の外は、シルクハットの中。

石工（小説）

石工　時合秋人

暴君ユリウス、彼は支配する帝国において様々な職人たちを集めては、様々なものを作らせて、気に入らなければ職人たちを処刑した。処刑の方法は、その時々で、皇帝ユリウスが決め、火刑、八つ裂きの刑、圧迫、銃殺、グリッドアイロンなどがあった。皇帝は処刑を眺めては楽しみもする。
これは、そんな暴君の犠牲になった一人の青年の物語である。

初夏、そろそろ太陽が傾き始めて昼の熱さが徐々に拭われてきたころ、港町モイからシャールモントという村へと続く森の中の道をある一つの影がゆく。それは、アレン、海を一つ跨いだ島国ハープランドから帰ってきた石工であった。
アレンは、シャールモントの出であった。シャールモントは、村の住人の多くが石工であり、棟梁を中心に組織を形成していた。周辺の町の教会の建造などをして、村ぐるみで建築をしていた。アレンはその中で育ち、１２歳を過ぎて、本格的に石工の仕事を始めるとたちまちその頭角を現した。だが、元が貧しい出であり親はアレンが１３歳を過ぎたころに死んだ。そこに手を差しのべたのは、棟梁のボブであった。その才能でボブに気に入られていたアレンは、ボブの家においてもらえることになったのだった。だが、その家にはボブの溺愛している一人息子のウィリアムがいた。ウィリアムは才能が有り父に気に入られているアレンを疎み、アレンもまた傲慢なウィリアムを嫌い、お互い反目しあう仲であった。
さて、ユリウス帝にはブラーチエという非常に有能な側近がおり、ブラーチエはこのまま皇帝の振る舞いが続けば、この帝国の職人は減る一方で産業が衰え、国力の低下につながると考え、国に認められた者が国の援助を受けることができる仕組みを整えた。
アレンは、１７歳でこの制度の恩恵に預かり、建築産業の進んだハープランドにて建築技術に加え、設計も学んだ。そして、４年の時を経て、生まれ故郷に戻ってきたのだ。
村に着けばもう夕日が照らしていた。村の皆は４年ぶりの再会を大いに喜び、祭りの準備を始めた。もはや彼は一種の英雄であった。
「向こうの様子はどうだった。いい女はいたか。」などと問いかけてくる者もいれば、「明日の朝から設計の事教えてくれよ。」などと頼んでくる者もいた。そうやって、アレンは夜も更けるまで皆に囲まれていた。運良く周りから人が引いたとき、この熱気を帯びた空気から出て夜風にあたろうと思い立ち上がった。そして、村はずれの石段に座って一息つく。そこへ、声をかけてくるものがあった。セシリアと名乗る女で、一年ほど前内陸の国境際の村から家族を残して越してきて、定期的に商品をモイの町で売って生活をしているそうだ。この村が好きだとも語った。いままで石工一筋だったアレンはその会話の端々で現れる彼女の女性的な微笑みに何とも言えぬ気恥ずかしさを覚えて、その日は会話を早々に引き揚げて喧噪のなかへ戻った。一目惚れであ

った。

　セシリアとアレンは知的で小説を読んだり、落ち着いた時を過ごすのが好きな性分で、気の合う二人はだんだんと恋に落ちて行った。
　また、アレンは村の石工たちと主に仕事を行った。その仕事というのは他の町の依頼を受けて教会やら聖堂やらを建てることであった。２年間もそうこうしているうちに、アレンの名はどんどん広まっていった。棟梁であったボブが死に、息子のウィリアムが棟梁を継いだという変化も起こった。

　そして、アレンはある日、ユリウス帝によばれ首都ラーンの城へ赴いた。そして、ユリウス帝の別荘を建てる仕事をもらった。それは、アレンが設計をすべて考案し、それを石工たちに作らせるというものだった。しかし、それだけではなく、アレンだけは別荘にユリウス帝の隠し部屋の設計から完成までを受け持つという内容も含まれていた。隠し部屋というからには誰にも知られてはいけないわけで、作業は、別荘が表向きに完成してからにしなければならない。
　アレンは、それから設計図を完成させ、建造をスタートさせた。多くの良い石工たちが集められていたため半年後が経つ頃に、完成は見え始めていた。だが、アレンはこのとき疑心暗鬼に駆られていた。皇帝ユリウスにアレンに隠し部屋造りに取り掛かったら、完成までその現場から出てはいけないといわれた。それは、アレンが隠し部屋の事を他言するのではと信頼をしていないということであり、すなわち、完成後にアレンを殺そうとしているのではないかと考え始めたのだ。そして、彼は深謀遠慮の末、殺されるならいっそ皇帝を殺してしまおうと決意し、隠し部屋に足を踏み入れた者に天井が落ちてくるような設計をすることにしたのだった。
　その少し前、数年前から力をつけ始めていた隣国がついにユリウスの帝国の侵略に動き出したのだ。国境付近は戦場になり、セシリアの家族が住むエグリッシュ村は壊滅した。セシリアの家族は両親が死に、１５さんに満たないセシリアの弟と妹の二人だけが助かり、近くの修道院に保護されたようだった。それから、その二人は、唯一のあてであるセシリアの住む村へとやってきた。だが、セシリアには二人を養える余裕はなかった。そこで、セシリアは全財産をかけて、羊毛を買い、内陸のほうのグレーストーンというところで行われる、大規模な羊毛市に店を出すことを決意した。
　グレーストーンの羊毛市は四日間行われる。セシリアはグレーストンに蔵を借り、羊毛をためていた。初日、売れ行きは好調でセシリアはおおいに期待できそうだと安心していた。しかし、不幸は起こった。その日の午後、市の賑わいがピークを過ぎたころに進軍してきた隣国の軍が羊毛市を襲撃し、火を放ったのだ。彼らの狙いは、この大規模な市を開かせないことだったようだ。セシリアは、何とかその場から逃げた。セシリアはそれまでに得た金を持ってはいたが、全財産をかけて買った羊毛が蔵ごともうもうと煙の立ち込める炎の中に埋もれてしまった。彼女がシャールモントに帰ると夜になっていた。帰るなりたちまち頽れた彼女から事情を聞いた皆はしばらく金を出し合って世話をしようという話でまとまった。
　それからというものセシリアは仕事をしようとしたが、良い仕事になりそうなものはなかった。そんなところに、突然、セシリアに想いを寄せていたウィリアムが結婚を申し込んできた。ウ

ィリアムに気に入られかわいがられるようになっていた弟も結婚するように迫ってきた。セシリアは熟考したが結論は出た。今の厳しい状況を作ってしまったことにセシリアは責任を感じていたし、ウィリアムの家なら下の二人を養うことができると考えウィリアムの求婚を承諾することにしたのだ。
　セシリアの承諾でウィリアムの結婚が決まった日の夕方、アレンはシャールモントへ帰ってきた。アレンにとって皇帝を殺すという一世一代の仕事を前に、セシリアへ自分の想いの丈を告白しようと思ったのだ。
　セシリアはアレンに謝った。現状をアレンも受け入れた。そして、二人は村から少し離れた小屋で一晩共に過ごした。アレンはその夜、セシリアを知った。
　翌日、アレンは傷心で建設現場へと戻っていった。アレンはやりきれない気持ちをもてあまし、その思いを隠し部屋の建造にぶつけた。

　それから十日後、ウィリアムとセシリアの結婚式が行われた。またアレンのほうは、一人仕事が始まった。
　その日の夜、ウィリアムの期待を裏切りセシリアは、ウィリアムとともに遂げることはできなかった。そして、その日セシリアは自分が妊娠したことを悟った。それはもちろん、ウィリアムの子などではなく、アレンの子であった。セシリアはそのことを隠し通すことにした。
　ウィルは初日以降も夜に同じ反応を見せるセシリアに次第に苛立ちを覚え、暴力をふるうこともしばしばあった。
　その後、ウィリアムは次第にセシリアを相手にしなくなり、苛立ちのはけ口にされた。セシリアは服を着込むなどして、妊娠を何とか隠し続けた。

　そうして、１１か月ほどが経った頃、ついにセシリアの腹に宿る生命が外界へ出る準備を整え終わってしまった。出産のときが来てしまった。
　ウィリアムは自分の妻が他人の、しかも最も嫌悪するアレンの子を産んだことを知り、大いに憤慨し、「ここは俺の家だ。お前なんか出ていけ。」といい、セシリアを村から追い立てた。
　セシリアは、生まれたばかりの子を抱えながら修道院の世話になるために修道院を目指した。

アレンは、ちょうどそのころ仕事を完成させていた。皇帝は別荘へ出向くと彼にいった。「気に入った。例の部屋も最高のものであればお前を特別に直属の建築士に取り立てようではないか」と。アレンはその言葉に唖然とした。自分の憶測は全くの誤りで、とてつもない過ちを犯してしまったことをいまさらのように後悔して、自らの行いを告白した。すると、皇帝は大仰な驚きを一時見せた後にすぐさま顔は怒りに染まった。
　アレンはひっとらえられ、樽に裸で詰められ、周りから軍兵の剣で死ぬまで刺され続けるという酷い刑を受けて死んだ。
　あまりにも情けない天才的な石工の最後であった。

最後に。セシリアは赤子を産んでほとんど体力を失っていたため、次の町へたどり着くこともなく、道端で力尽きた。翌日に、通行人に発見される頃には息絶えており、彼女の胸に大事そうに抱えられた赤子ももはや骸であった。

終

計算狂い（ショートショート）

　計算狂い　ローザ・パークス

「おい、お前が健吾を憎んでいたことは知っているんだ、彼を殺したことを認めろ！」
さとしは検事からの尋問をされている途中だ。
「いいえ、私は何も知りません」
さとしは落ち着いた声で答えつつ、心の中でニヤニヤしていた。
なぜかって、あいつらに仕返しができるからだ。まゆみに非常に似た殺し屋を雇って健吾を死なない程度にナイフで刺してもらったのだ。健吾はかろうじて警察と救急車を自分で呼んで、今は気を失っているようだ。
健吾が気をとりなおせばこういうだろう。
「まゆみにやられた」
　一年前、僕とまゆみは、交際していた。このままいけば結婚まで行きつけるかもと思った矢先に、まゆみを健吾に奪われた。俺はあいつらが憎くて憎くてしょうがなかった。だからあいつらがどちらも不幸になる方法を練ったのだ。健吾は重傷を負い、まゆみは捕まる、くっくっく……。
　ほどなくして、健吾は意識を戻したが、彼は非常にまゆみを愛していて、またさとしを憎んでいたので検事にこういった。
「さとしにやられた」

きっと明日は、みんなのヒーロー（小説）

　きっと明日は、みんなのヒーロー　とやま

『ぼくのしょうらいのゆめはヒーローになることです。かいじゅうとたたかってみんなをまもりたいです。』
****
「よし、今日からついにヒーローだ！」
　ガッツポーズをして、満足そうにひらがなとカタカナでかかれた作文を見つめるこの男、坂田陽太郎。25歳。幼いことを言ってるように見えていたって真面目。だって、今日から彼は本当にヒーローなのだから。
「あっ、忘れ物した！」
　ヒーローといってもさまざまなタイプがある。例えば、怪獣と戦ったり、空を飛んだり…。
　しかし、こんな人だけがヒーローではない。
「あれ？どこやったかな。」
　慌てた様子の陽太郎。その姿はまるで普通のおっちょこちょいな青年。しかし、
「あっ、落ちてんじゃん。」
　警察手帳を拾い上げる彼こそ平和を守るヒーローこと、新米警察官なのだ。
****
「がが一っ」と若干がたついた自動ドアがあく。陽太郎はそんなことは気にもとめずに中へと入っていく。
「あのー、僕、坂田陽太郎と言うんですけど…」
　受付の人に部署の場所を聞いた。最初は、なんの自己紹介だ、と思っていた受付の人もなんとなく雰囲気から察し、たどたどしい日本語で、
「あっ、新人の方ですね。えーっと坂田さんはじ、14班になります。」
と苦笑いしながら言った。この時、陽太郎はまだ『どうやらこの人もまだ入りたての警察官のようだ』としか思っていなかった。
　結局、受付の人には署内の地図をもらった。しかし、この地図のどこに〝14班〟があるのかわからなかった。なぜならそこに書いてあるのは「佐藤」、「田中」などの名字のような漢字のみで数字がみあたらないのだ。
『どうせならこっちの名前でいってくれればよかったのに。』などと受付の人に多少苛立ちを覚えながら地図と格闘していた。
****
　受付から多少離れたところで地図を逆さまにしたり、裏返したりしてる人がいた。
「こりゃ、確実にお目当ての人物だな。」
　長身の男はそう言って近づいていく。
　あのように地図の隅々まで探しているのは、番号でしか呼ばれない〝あの班〟のやつしかいない

。長身の男はその人を探していたのだった。
「君、迷ったの？」
****
「君、迷ったの？」
　長身の男の人がいきなり聞いてきた。こりゃ、助け船だ、とでも思ったのか、陽太郎は、
「はい、あの14班ってどこですか？」
と若干食いつき気味に聞いた。
「なら、ここだよ。」
　男はまるでわかっていたかのように地図の隅を指さす。そこには〝小知班〟と書いてあった。〝こしれ〟と読むのだろうか。
そして、よくみると、そのまた隅に〝14〟と書いてあった。
「あっ、ほんとだ。ありがとうございました。」
「俺もその班だから一緒に行こうか」
そう言って男は歩き出した。
「はい。あの…僕、坂田陽太郎といいます。」
緊張した面持ちで陽太郎がそう言うと
「あっ、名前いってなかったね。俺は〝かきぬまこうじ〟だ。」
と言って、〝柿沼浩司〟と書かれたネームプレートを見せる。
「あれ、ネームプレートって…」
「ああ、あっちにあるから大丈夫だよ。」
〝あっち〟とは14班のことだろう。
「よし、じゃあいくぞ！」
「はい！」
****
　歩いたり、階段を下ったり上ったり、また歩いたり…。
　地図の隅っこにあるぶん、そこまでの距離は相当なものだった。
「まだつかないんですか～？」
「あともうちょっとだから頑張れ。」
　もともと陽太郎は体力がないわけではなかった。しかし、急な階段だったり、長い道だったり、とにかく疲れるような道のりばかりなので、さすがに疲労を覚えながら歩いている。それに、何しろ柿沼の歩くスピードが早くて…。
　耐えかねたのか陽太郎は、
「あの、階段、のぼったり、くだったり、するなら、もっと、簡単に、いけるんじゃ、ないですか？」
と多少息切れしながら言った。
「エレベーターで一本だけどな、もし、災害とかで停電が起きた時、歩いて出れないと困るだろ？そのために、今なんとなく道を覚えさせるために遠回りして歩いているのさ」

柿沼がこう言ったとき、陽太郎は柿沼についていかなければ良かったと後悔した。

　しばらくすると一本道に出た。その突き当たりにはひとつのドアがあった。ようやく着いたようだ。
　ドアを開けると、中にはわいわい騒いでる人が２人いた。
　２人はこっちに気づくと
「あっ、やっと来た。どうせ、遠回りしてきたんですよね？」
「手～つないできたの？」
とそれぞれ質問をして来た。しかし、柿沼は
「よし、じゃあ自己紹介しよう！」
と言った。うまいことスルーしたようだ。
「〝みやざきかずひこ〟です。33歳です。異動でこの班に入ってから４年です。」
とさっき敬語で話しかけてきた男は〝宮崎和彦〟と書かれたネームプレートを見せながら言った。
　妙に丁寧な言葉を使う大人っぽい人だ。
「俺、いつも元気な〝みはらけんた〟くん31歳。この班に最初から９年入っているよ～。」
さっきため口で話しかけてきた人が〝三原健太〟と書かれたネームプレートを見せながら話す。
　こっちは年齢の割にはわかい人だ。宮崎との差はわずか２歳。
「で、あそこで寝ているのが〝おちけんじ〟っていう班長ね！」
　三原は部屋の奥を指差しながらそう言って〝小知健二〟と書かれたネームプレートを持ってきた。
『〝小知〟は〝おち〟と読むのか。変わった名字だな。』などと思いつつ一人一人の名前と特徴を軽くメモした。もちろん、名前を覚えるためだ。
「新入くん名前は？」
三原が聞いてきたので陽太郎が口を開くと
「柿沼浩司38歳。よろしくお願いします！」
なぜか隣から何か聞こえてきた。
「えーっ！」
　思わず声をあげてしまった。だって、先輩のように遠回りさせてきた人が新入だなんて！かなりびっくりしている陽太郎。
****
　その後、自分の自己紹介をすませた後も動揺を隠せなかった陽太郎。三原に、異動だからね、と言われてもやはりあの態度に納得がいかず、かれこれ一時間ずっとそのことを考えていた。
　すると、いきなりあくびをしながら班長が起きてきた。
「じゃあ、今日の仕事を発表します！」
　なんともユルい感じで仕事が始まろうとしている。
「宮ちゃん健くんいつもの持ってきて！」

　小知がそういうと、宮崎と三原は外からホワイトボードを持ってきた。
「今日の仕事は…清掃と付近の巡回です！」
　小知は大きく、〝清掃〟〝巡回〟と書いた。これって必要なのか？
「清掃ってのはね、警察のなかの掃除だよ～。巡回ってのは近所が平和か見回りだよ～。」
　わかりきったことを説明してくれた三原。てか清掃って要は雑用じゃないか！
「はい、じゃあ坂田くんと健くん。しゃべってたから清掃担当ね！あとから巡回に合流するように」
　班長というよりまるで小学校の先生だ。しかし、清掃とは具体的すぎて何をするのかわからない。すると、三原が壁に貼ってある〝掃除表〟を見ながら
「え～っと今日は窓ふきか」
と言った。これぞ本当に小学校だ。まずこの小学校みたいな清掃を普通にやろうとする三原はおかしい、確実に。
****
　その後、署内のすべての窓を五時間もかけてふいた。何しろ窓の数が尋常じゃなかった。そして三原が
「まどふきまどふき楽しいな♪」
などと変な歌を歌うので陽太郎はしっかり集中できなかったのだった。
　今は一旦仕事が終わったため、三原のおごりで二人でオレンジジュースを飲んでいるところだ。
「俺、オレンジジュース大好きだしさ」
などと三原はいっていた。もはや大人っぽい部分が見当たらないほど子供な人だ。
「うちの班、変わってるでしょ？」
「まあ…」
「そりゃそうだよな、掃除表なんて他の班にはないもんな。」
誰がどうみてもおかしな班だよな、と言う三原の顔は少し残念そうだった。
「あっ、あれ宮崎さんじゃないですか？」
「おっ、ほんとだ。」
「宮崎さーん」
　手を振りながら走っていく陽太郎。うしろで三原が
「今度はいつまでだろうな。」
としみじみと言ったのには気づいていなかった。
****
「君たちねー、サボっちゃダメですよ」
　走ってくる陽太郎と歩いてくる三原に注意する宮崎。
「休んでただけだよ～。宮ちゃんいないから待ってたんだよ～。」
「宮ちゃんって、何度も言いますけど、僕、一応あんたの先輩なんですけど」
「いや、この班では先輩なんだぞ。君が入ってくる五年も前から僕はこの班にいるんだぞ。」
「なら、あなたは柿沼さんに柿ちゃんって言いますか？」

「…。でも、宮ちゃんは宮ちゃんでしょ～。なっ、陽ちゃん。」
「はっ、はい。」
「ほら見ろ、陽太郎くんだって困ってるじゃないですか。」
「陽ちゃん、遠慮しなくてもいいからね。」
　少し会っただけでも本当によくしゃべる三原と宮崎。本当に仲良しだと陽太郎は思った。
　ただ、２人とも２人なりに陽太郎に気を遣っている。陽太郎がくる前に、今度こそは、と決めたのだから。
「おい、陽ちゃん。巡回はもっと元気に行こうや。」
「巡回ってなにするんですか？」
「何か起きてないか確かめにこの町を歩いて回るんだよ。」
　三原が陽太郎にざっくりと説明している。正直、言っていることは小知班長と一緒だ。
　そんな中、後ろから二人を見ていた宮崎は
「大変ですけどなれてもらうしかないですから。」
とつぶやいた。
****
　その後、ポイ捨てされたタバコを拾ったり、近所の人と話したりした。
　けれど、陽太郎はとても心配だった。警察とはもっと派手な仕事が１つはあると思っていたのに、さっきから清掃に巡回…。本当に〝ヒーロー〟なのか。
　もっと聞き込みやら犯人確保やらが仕事だと思っていた。
　すると前からたくさんのみかんとともに
「お兄さん、みかん拾ってくれ！」
という声が聞こえた。
　もちろん三原と宮崎と３人でみかんを拾った。どうやら八百屋さんが落としたようだ。
「はい！どうぞ」
　３人とも手一杯にみかんを抱え込む。ありがとうと八百屋さんが言っているなか、
「事件解決！」
と言って三原はノートになにかを書いた。
「三原さん、それなんですか？」
「えっ、これは解決した事件をまとめたノートだよ」
「ちょっと見せてください」
　陽太郎は今までにこの班がどんな事件を解決してきたのか気になったため、ノートを借りた。
　中を見るとバラバラな日に何個か文字が書いてあった。
　ただ、内容は〝猫の保護〟、〝道案内〟などごく小さな出来事ばかりだった。強いていうなら、ひったくり事件や窃盗事件がごく稀に書いてあった。ほとんど警察らしい事件を解決していないのだ。陽太郎はここにいて〝ヒーロー〟になれるか心配になった。
****
　その後も事件は起きなかった。まるで避けているかのように。これでは、警察ではない。もはや

、人助けだ。いや、人助けすらほとんどしてないかもしれない。
　陽太郎はがっくりしながら署に戻った。そこで、たまたま今日起きた事件についてまとめてある表を目にした。「万引き」、「強盗」、「交通違反」、「不審者」…。なかには陽太郎たちがいたすぐそばで起きたものもあった。
　現場付近にいた陽太郎たちを呼ばなかった…。つまり、小知班は事件を担当しないのか？よからぬ不安が陽太郎の頭をめぐった。
****
「なんてことしてるんですか！！」
廊下に響く宮崎の声。
「だって、ノート見せてって言われたんだから…。ごめん。」
すまなそうに頭を下げる三原。
「見せてって言われたら見せるんですか。だいたい、あなただって同じようにはいってきたでしょ。」
「見せてって言われて見せなくても怪しいじゃん！てか宮ちゃんも暗い感じだったけどおれらと話して結局打ち解けたじゃん！」
「まあそうですけどね。じゃあ、あなたが落としまえつけてくださいね。」
「そうだね、なんとか説得してみるよ。」
　なんだかんだ言って陽太郎思いだ。まあ、何年もこの班にいると嫌でもそうなるのだが。
****
　明くる日も明くる日も、小知班は事件に呼ばれなかった。あちらこちらで事件は起きているのに一度として呼ばれたこともなかったのだ。
　ある日、陽太郎は帰るためにエレベーターに乗った。その時、知らない二人組が、
「ねぇ、カッキー最近見ないよね」
「確かに、エリートだったのにどうしたんだろうね？」
こんな話をしていた。カッキーとは柿沼のことだろうか？
『柿沼ってエリートなんだな～。』
などと思っていた。しかし…。
「それがさ～、落ちこぼれ班に入ったらしいんだよ。なんで入ったんだろうね。」
「そんなの、私用があったんじゃない。あっ、それかあのやる気ない班をどうにかして変えたいとかね。」
　チンという音ともにエレベーターが開いた。笑いながら彼らは降りていった。同様にみんなが降りていくなか、陽太郎は歩き出せずにいた。
****
　そんなある日、陽太郎たちは事件に遭遇した。
「先輩、あれなんですか？」
　陽太郎が指差した先には何かを持って走り去るひとがいた。
「あれって強盗じゃない？」

　三原がいう。確かにそう見える。
「よし、じゃあ捕まえにいきましょう。」
　陽太郎が走り出そうとしたが、三原がひき止める。
「ダメだ。通報するぞ。」
「どうしてですか！今、目の前で事件が起きてるんですよ！他の警察呼ばないで自分達で逮捕しましょうよ！それとも指加えてみてろっていうんですか？」
「だから、通報するんだろ。おれらがやったところで邪魔になるだけだ。」
「だから落ちこぼれって言われるんでしょうが！」
「ちょっとここじゃ邪魔になるからこっちこい！」
　三原が陽太郎を呼び寄せた。
****
　すでに『落としまえをつけろ』と言われてから一週間がたとうとしていた。しかし、三原はいまだに陽太郎を説得していなかった。
　それは、タイミングがなくてどのように切り出せばいいかわからないからでもあるが、一番の原因は彼の怒らないという性格からであった。
　しかし、今陽太郎は三原にこの班のあり方についてきれてきた。
「ちょっとここじゃ邪魔になるからこっちこい！」
　性格にはあわないが、ここで説得するしかないだろう。三原は意を決して説教することにした。
****
　こっちこいと言われて、道から外れて裏道のせまいところに行った。すでに陽太郎の怒りは頂点に達していた。
「陽太郎、いいか。まず、お前はなんで警察になろうとしたんだ？」
「僕はヒーローになりたくて、みんなを助けたくて警察になったんです。だから、事件を目の前にしながらこうやって見過ごすっていうのが許せないんですよ！こんなんだから、やる気のない落ちこぼれと言われるんですよ！」
「陽ちゃんが言いたいことはそれだけか。はぁ…。」
　三原はやれやれと言った素振りをしながらため息をついた。
「それだけってなんですか！僕にとっては大事なことなんです！まあ先輩にはわからないでしょうけどね」
「陽ちゃんにとってさ～、ヒーローってなんだ？もしかして表に立って大きな事件を解決する人がヒーローか？今俺らがやってることは人助けじゃなくて、ただのおせっかいか？」
「…。でも、事件が目の前で起きているのに無視するなんておかしいですよ。」
「それが…。それが俺らには解決できない事件だから。しょうがないじゃんか。」
「なんだって挑戦してこそヒーローじゃないですか。諦めちゃただの落ちこぼれなんですよ！」
「おれらはどうせ落ちこぼれだよ…。」
　うつむきながらつぶやく三原。意外な反応に陽太郎はどんな顔をすればいいのかわからなかった。

「陽ちゃん、うちの班がなんであるか知ってるか？」
「そんなん知りませんよ。」
「小知さんがね、とーっても情報収集がうまい〝プロ〟だからだよ。」
「だったら、小知さんがもっといい班にいけばいいじゃないですか。」
「それがね…、言いたくないんだけど…。小知さんは、犯人殺しちゃったことがあるんだ。」
　あんなに優しそうでやる気無さそうな小知が人を殺した…？陽太郎は信じられなかった。
「ああ見えて、とっても正義感あふれる人なんだよね。悪気はないんだけど、さすがにやりすぎだよね。一応、正当防衛だったってことになったんだけどね。」
「…。」
　二人とも悲しげな顔をしている。様子を思い浮かべるとどうしようもないほど切なくなった。

「それで、優秀な人材を失いたくないけど、これ以上大きな事件を担当させることはできないって…。だから、こうやって〝落ちこぼれ〟の班の班長として小さなことを扱いつつ、大きな事件の情報収集をしているんだよ。もちろん情報収集だけで捜査はできないんだけど。」
「小知さんは、巡回の間、そんなことをしてるんですね。」
「うん。最初はね、俺を含めた４人が警察に入りたてなのに入れられたんだ。まあ、入りたてのときはみんな今の陽ちゃんみたいだったんだ。それで、みんなやめちゃったり、事件起こしたり…。俺だってつらいんだよ。ただ一人この班に残るなんてね。」
　涙目になりながら弱音を吐いた三原。陽太郎は、
「それだけ三原さんの正義感が強いんですよ」
となぐさめた。
「さっきも、僕にヒーローってなんだって聞いたじゃないですか。説得してくれたじゃないですか。正義感あふれる先輩を持てて、僕は最高です。」
「かわいいこと言ってくれるじゃないか。ただ意見変えるの早すぎだろ。」
　三原は陽太郎をこづいた。二人で笑いあった。陽太郎はもう怒っていなかった。それどころか、この班の班員でいたいと思った。
****
「宮崎さんはどんな風にここにきたんですか？」
「え、宮ちゃん？言ったら怒られないかな。」
「怒られますけど、別にばらしませんから、ね？」
「宮ちゃんはね～、もともと爆弾処理班だったんだよ」
「あっ、まさか…」
「そう、爆弾解除が下手くそで爆発させちゃったんだよね。」
　これまた思ったよりも強烈なエピソードが出てきた。
「じゃあ、柿沼さんは？もともとエリートだったらしいけど…」
「それがさ～、柿沼さんはほんとにわからないんだよね。このままいくと警察の幹部みたいなえらい人になれたのにね。」

「へ〜。柿沼さんそういえば〝カッキー〟って呼ばれてましたよ。」
「カッキーとか…ねぇ。」
　２人で笑いあった。そんなこんなで最初の雰囲気とは違った雰囲気で帰ってきた２人だった。
****
『任務完了！』
　こんなメールが三原から届いたのはついさっきだ。
　三原が陽太郎をそとへ引っ張り出す姿や、２人で笑いながら帰ってくる姿を見ていただけに、〝任務〟が何を示すのかすぐにわかった。それと同時に宮崎は安堵の表情を浮かべた。
「やればできるじゃん。」
　そうつぶやく宮崎。すぐさま小知に、
「しばらくこのメンバーでやることになりそうです。」
というメールを送った。それほど、この結果は嬉しかった。
　ただ、不安もあった。この班に入って以来、何人もの人にやめられているからだ。けれど、陽太郎なら…。あのまじめで一途に頑張る陽太郎なら違う気がした。
　もしかしたら、若い頃の宮崎と重なるところがあるのかもしれない。
****
　宮崎からメールが届いた。
『しばらくこのメンバーでやることになりそうです。』
　宮崎がこのように仕事中にメールを送ってきたのはいつ以来だろうか。
　まあもとからメールを送ってはいけないとは言っていないのだが、小知の情報収集の邪魔にならないようにと宮崎は遠慮していた。(三原の場合また別の話だが)
　それをわざわざ送ってきたのだから、(遠回しな書き方ではあるが、)宮崎は相当嬉しかったのだろう。
　小知の前では緊張するのか一切話さない陽太郎。ただ、小知だってわかっている、彼の持ってるものは。
「小知班、再出発か。」
　歩みを再び進め始めた。
****
『一時はどうなるかと思いましたが、どうやら、これからもこのメンバーでいることになりそうです。よろしくお願いします。』
　宮崎が柿沼に送ったメール。妙にかしこまってるのは慣れてないからだろうか。それとも年齢的に目上だからか。
「よし、これで全員に送ったかな？」
　宮崎は携帯を閉じた。しかし、その時、思い出したかのように、
「そういえば柿沼さんってどんな人だろうか？」
とつぶやいた。
　班員誰もがよく知らない、柿沼浩司という男は、一体どのような男なのだろうか？

****
　三原と陽太郎が帰るために小知班に戻ると、中には他のみんながいた。
「今日は小知班再出発のお祝いだ！」
　小知の言葉と共にクラッカーが鳴らされる。
「そういえば、宮崎さんもともと爆弾処理班だったって本当ですか？」
「あ～、どうして陽ちゃんが知ってるのかな？まさか、ねぇ。」
宮崎は三原をにらみつける。
「え、あ～、陽ちゃんどこからそんなこと知ったの？」
「しらばっくれないでくださいよ。まったく、君たちはそんなことばっか話してるんですか？」
「いや、宮ちゃんのことだけじゃないから。他にはねぇ……カッキー。」
　三原が笑い出す。陽太郎もつられて笑いそうになるが、柿沼の様子が恐ろしかったので堪えていた。
「三原くん、坂田くんどういうことかな？」
「いや、三原さんが勝手に言い出したことですから、僕に聞かないでください。」
「おい、陽ちゃんうそつくなよ。ずるいぞ！」
「まあ、二人とも後で話があるから。」
「小知さん、いつの間にか寝てるし。起きてください！」
「そういえば、この班、再出発したんだから、モットーかなんか決めない？」
「三原、ノリ軽いな。ここは、新人くんから一言もらいますか。」
「え？僕？しょうがないなぁ。よし、じゃあね…」
　そう言って手帳に何かを書き出す陽太郎。何度か書き直した上で、ペンを置く。
「『きっと明日は、みんなのヒーロー』？いいんじゃないか。」
「じゃあ決定だな。」
　小知が三原の手帳を破りとり、部屋の壁にはる。
「ちょっとちゃちくないですか。」
「いいじゃないか、よし、帰ろうか。」
　みんなが笑顔だった。三原も宮崎も小知も陽太郎が残ってくれることにとても喜びを覚えていた。
「小知班再出発おめでとう！！」
****
　今日も街のなかを巡回する小知班。誰もが落ちこぼれだと思っていた彼らは、彼らなりに人助けをしている。
　かつて罪を犯し、事件から離された小知班長。
　もともとエリートなのに自分から小知班へ異動した柿沼。
　明るく元気なムードメーカーであるが、やるときはやる三原。
　かつて仕事を失敗し、左遷されたかのように小知班にきた宮崎。
　そして、人一倍ヒーローを目指して努力する陽太郎。

　それぞれ全然違うのに、みんなで一致団結して進んでいく５人。
　その道のりは遠回りだけれども、彼らは一歩一歩〝みんなのヒーロー〟を目指して一日一日歩き続けている。

Fin.

あとがき

　「きっと明日は、みんなのヒーロー」いかがだったでしょうか。え、微妙な終わり方ですと？すみません、この小説の本当のテーマは『サクセスストーリー』のようなものだったんですけど、このあと事件が起きたり、推理パートがあったり、とても長くなりそうだったんでやめたんです。
　中途半端なところを消化しましょう。柿沼について。基本的に読者の皆様の想像にお任せしますが、実力が話題性に負けてしまったとでもいっておきましょうか。彼は『エリート』ではなくて……。ここから先はなんとなく想像がつくでしょう。
　明日のヒーローは何気ない人だったりするんですよね。そんなことを感じていただけたら嬉しいです。

解決　やくると

光がさした舞台の上に、五体の布人形がおかれている。キュラキュラという音がして、上から吊るされている、文字の書かれた板がおりてくる。

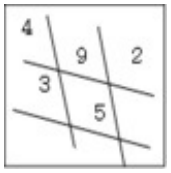
（設定）
○五月、この町で五件の連続通り魔殺人がおこっている。いずれも目撃者はおらず、夜間に行われたものとみられる。なお、日付は発見日の前日とした。
○「連続」とされているのはすべての遺体の顔が、同じ手口で焼かれていたため。身元は所持品から特定された。また、すべての現場にタロットカードが置かれていた（なお、現場ごとにおかれたカードは異なる）。

日付	被害者の名前	カード
3(月)	秋田雄大	2女教皇
7(金)	谷山寛太	3女帝
11(火)	岩西佐助	4皇帝
19(水)	又吉博	5教皇

三十秒ほど吊られた板が上がっていく。このときもキュラキュラと音がする。
板が見えなくなるまで見届けて舞台に視線をもどすと、いつのまにか円卓が置かれ、周囲には等間隔に六個の椅子がある。さきほどの布人形が椅子の上に移動している。人形はひとつ増えて六体になっているので、椅子はすべて埋まっている。
暗転。舞台の奥にある黒幕に光があたり、白い文字が浮かびあがる。

『解決』

（佐藤・中村）
いつもの集まりで、中村寿阿が「この事件について、ちょっと気づいたことがあるんだよね」といいだした。「へえ？」「まあそのあと話が進まないんだけど」とりだしたメモがまわされ、全員確認しおわったあとで中村が話を再開する。



「遺体の発見場所の配置ね。数字は置かれたカードの番号。……気づかない？」「いや

、全然」「まあそうか。じゃあこうしたら？」中村が図にペンで線をかきくわえ、机の中央に置いた。
「分かるわけない……あ、分かった」といいながら加賀直樹は馬鹿馬鹿しさに満足する。「魔方陣ってこと？」

4	9	2
3	5	7
8	1	6

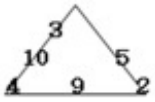
「そう。でもここから先に話がすすまないんだけど。つぎの犯行場所が特定できるわけでもないし」「そうだな、あえてこじつけてみるなら……」佐藤龍忠がうれしそうに手をこすりあわせながら話しはじめた。
「３×３の魔方陣は洛書とよばれ、中国では聖獣である亀の背中に記されていたと伝えられる。また西洋においては、３×３の魔方陣は土星を意味する。そしてタロットカードで土星に対応するのは21世界だ。したがって『亀のうえに世界がのっている』状態がつくりだされた。これは古代中国や南洋諸島の神話にも登場する世界観だが、中国と西洋の間をとって犯人は古代インド神話の信奉者だと、」
「とまれ。……古代インド神話の信奉者って、この町にそんな奴いないだろ。インドにもいるかどうか。たしかに半分冗談だけど、なんだってそんな無茶苦茶な話にするんだ」
「半分どころか冗談にもならないよ、中村」青木春が口をはさむ。「君は知らなかったらしいけど、昨日も事件あったんだよ」「え？」
「で、そのタロットの番号が10です。だから魔方陣にはなりませんね」原芦宗があとをひきついだ。

29(土)
十日町喜多郎
10運命の輪

　中村はがっくりきたようだが、ほかの五人は盛りあがった。元来が無意味でばかげた解釈を好む者の集まり。このような与太は望むところだった。そして、実際の事件が俎上にのることなどついぞなかった。もちろん現実に被害者の出ている事件をネタにするのは後ろめたくもあったが、中村の話のあとではたがはずれていた。
「せっかくの機会だし、おれも解釈アイデアを披露させてもらおうか。他に思いついたやつはいないな？」
　まず高橋貞夫が名乗りをあげた。

（高橋）

「この日付、曜日がやたらとばらついてるだろ？　よくみてみると木曜日だけ存在しない。この木、で何かできないかと考えてみると、面白いことに気付く。被害者の上から二文字目の漢字、すべて木を部首とした漢字にできる。『果杣栖桔槝杳』ってね。
「曜日といい漢字といい、本来あるべき木がなくなった。なぜ？　犯人は被害者の顔を焼いていた。つまりここで表されているのは木が燃えて火が生じる様子、タロットがしめす四代元素説から連想するなら五行説いうところの『木生火』。土用を無視すれば春から夏に移り変わる五月に実行されたのも偶然じゃないかもな。
「で、火行は上へ向かう性質をもつゆえに、上向き三角形として表される。平面上の位置関係はさっき中村が見せてくれたが、あの図の左隅方向から位置関係をながめればいい。ただし、よことたてじゃなくて横と高さの位置関係だ」高橋も地図をだした。こいつ中村が何も言わなくても一席ぶつ気だったな、と苦笑しながら一同のぞきこむ。



「うまく場所を決めてそこから見るとこのような二等辺三角形ができる。火が形成されるわけだ。頂点が一つだけ埋まってないよな？　他の二つの頂点はきっちり埋めてることから考えて、犯人がそのうちここに死体を置くのは間違いない。場所が特定できればあとは現行犯逮捕だ。それが殺人か死体遺棄かは分からんが」

　青木と原が口々に「成立しないね」「根拠に不自然な点があります」と言った。高橋が「お」とたじろぐ。原が譲ったので青木が高橋に反駁した。
「ひとつ。そこからなら三角形にみえるというけど、ほんとかい？　地図を見る限りでも、三角形の中央部分や辺のかなりの部分が建造物などに浸食されている。もし現場地点自体は見えたとしても、そこに三角形を見ることはかなり難しい。まあこれは許容範囲かもしれない。
「ふたつ、カードについて。四代元素説で五行説を暗示するのは無理があるし、小アルカナを置きそうなものだけどそれは譲るよ。小アルカナを所持している人は少なそうだから、カードから身元が特定されるのを恐れたのかもしれない。問題は、上昇の火を示すにしては数字が上昇していないってこと。高いほど大きくあるいは小さくなるように数字をならべそうなものなのにさ。
「そしてみっつ、これが一番まずい。高橋、高さを調べるのに地図使ったね？　それも数年前の。現場が実際どうなってるのかしらないだろ」
「確かに見てないが……ひょっとして高さが変わってるのか？」「ご名答。現在では三角形の頂点にあたる土地は削られてなくなっちゃってるんだよね。犯行は不可能だよ」
　二人の会話が終わると、加賀が「俺ものっていいかな？」と手を挙げた。

（加賀）
「火をつけて自分の犯行だと誇示したりタロットカードなんてふざけた真似する奴は、自分の署名を残していくものなんだよ。だからそれを見つけることに注力する。
「最初に発見日の日付に注目してくれ。この日付、ぜんぶ素数なんだ。そのうえでカードの番号もみてみると、四つと二つが連続になっていることに気付く。つまり、六つの数はそれぞれ２か

ら13までの素数に対応するんだ。

2		2
3		3
5	←	4
7		5
11		9
13		10

「で、この素数はなにをさすのか。残っているのは被害者の名前だな。数字を被害者名のアルファベットに対応させる。具体的にいうと、最初の『秋田雄大akitayuudai』は上から二文字目のkと下から二文字目のaを選ぶ。二人目は上下三文字目でnとn。三人目は上下五文字目。以下同様にするとkannnashintaになる。まあカンナシンタあるいはシンタロウだろうな。電話帳もってるやついる？」

中村がハローページを開いた。「カンナシンタが一人この町に登録されている。あとは近隣地域にシンタロウが一人」

「犯人が登録していない場合をのぞき、そのどちらかが犯人だろう。シンタロウの場合は観察しつづければ現行犯逮捕が可能になる。シンタならどうしようもない。ただ、個人的にはシンタロウだと思う。つづりの前と後ろから、というのはたぶん21世界のウロボロスを現場におくことではじめて暗示できるものだから。ただしシンタロウの場合、残りがrou三文字っていう難点がある。これは前からと後ろからで同じ箇所の文字になることで解決するしかないから、始まりと終わりが同じものという意味でもウロボロスは欠かせないな。以上で終わりだ」

しばしの静寂が場を包んだあと（アルファベットの選択方法がぶっとびすぎていて逆に否定が浮かばなかったのだ）、原が「却下ですね、残念ながら」と言った。

「高橋さんのときも言おうと思ったんですが、あれは最悪なしでも成立する解釈でしたし。これ、犯人が被害者全員の名前を知っていなきゃ実行不可能ですよね。もちろん名前だけ入手してもだめで、夜間に襲えるくらいには顔と名前を一致させなきゃいけないし、全員の行動パターンも分かったうえで襲撃場所決めなきゃいけません。そこまで調査して警察にばれてないなら、調査した探偵事務所が警察に注進せずに協力していることになります」「ああそうか、組織が必要なバカ解釈はすでにバカ解釈じゃないからな……」うなる加賀に原が付け加える。「加賀さんの嗜好はしりませんが、組織的な犯罪なら個人名を残すのは疑問ですしね。被害者が事前に選ばれていたという解釈は避けましょう」

（原）

与太もここらで尽きただろう、とその日の集まりはそこでお開きになった。

「でもどうしたんだい、原。君が自説を披露しないなんて。こんな好機そうあるわけじゃないよ」

「なんですか青木さんは。自分も何も言わなかったじゃないですか、会員唯一のタロット占い師だっていうのに。僕も趣味でやりますが、やはりプロの青木さんに期待していましたからね……まあ、じつは僕の解釈がないでもないんです。時間ももったいないし、帰りながらにしましょうか」

「高橋さんの漢字の推理、ありましたよね。あれはタロットの数字にもあてはまるんです。人偏つけても漢字として成立する数字だけがあるんですよ、仁仨佃伍仇什って。」
　青木が笑いながら「よく気づいたね」と言った。
「高橋さんの木よりも単純です。被害者の隣にカードがあるから偏は人でつくりはカード、っていう発想ですから。では、この人偏になんの意味があるのか。いま言ったようにこの人偏は被害者を表します。顔を焼いたのは個としての被害者ではなく『人』を表すためです。そんなことまでしたわけですから、犯人としてはもう被害者には人偏以外に意味付けはできません。だとしたら、事件自体も犯人に人偏をつけくわえるために実行したのではないか。ここから考えて、犯人の名前はすべての漢字が人偏をつけて別の漢字になれるのではないかと思いました。つけくわえれば、それがそもそも思いついたきっかけではないかと」
　原は言葉をとめ、息を吸ってから話を再開した。
「これはかなり特殊な条件ですね。もちろんこの町の住人すべての名前に人偏をつけて試していくのはあまりに面倒です。しかし、この条件を満たす人物は少ない。犯人の年齢は分かりませんが、人名用漢字をおおまかに三千字としましょう。このなかで人偏をつけうるのは二百から三百文字くらいではないでしょうか。犯人の名前の文字数次第ですが、おおまかに千分の一もあれば十分多いでしょう。
「また、このなかでこの事件を起こしうる人物はさらに少ない。ほかに二つ絞り込みの要素をあげましょう。
二、タロットカードを持つ。最近は書店でも売っていますからそれなりに多いでしょう。十人に一人。
三、冷酷かつ悪趣味な人物。人を記号としてとらえられるような、または事件現場にタロットカードを残していくような。早い話が、現実の事件を肴に楽しめる僕のような人間です。これは百人に一人くらいですか。この三つをかけあわせれば、分母はこの町と近辺の人口を大きく超えます。つまり、この条件にあてはまる人物は犯人だと断定してもいいわけです。幸い見つけることができました」原が歩みをとめた。文字を思い浮かべる。『倩休倩』。「青木さんです」

　原が話し終わると青木はひとつうなずいた。そしてふたたび歩き出す。「なるほどね……お礼になるかは分からないけど、僕の解釈も聞いてくれよ」

（青木）
「僕としても犯人役は嫌だからね、一番目の条件は否定する。犯人の名前に人偏がつくとは考えない。君の見つけた数字の法則はどうやら確からしいけど、犯人の名前に人偏をつけられなくてもほかの可能性は考えられる。そうすると顔が焼かれた理由が別にあることになるけど、これはあとで言おう。
「たとえば犯人は人偏にすることで、本当の意図の隠れみのにしたのかもしれない。人が矢印になって犯人の家を指し示していた、とかね。犯人は一度署名をしたうえでそれを隠したわけだ。あるいは、推理小説なんかじゃ顔を焼くことで被害者と加害者が入れ替わる。今回はそれを隠すために人偏の

法則をつくった」
「それは弱くないですか？」「僕もそう思う。けど面白い偶然があったからね、そこは曖昧なままでも問題ないんだ。下手をすると単に混乱させるため、あるいは別人に濡れ衣を着せるための策かもしれないから。僕が一番信用できると思っているのは最後のやつなんだ」青木が小さく笑った。
「それじゃあ、なぜ顔を焼いたか、僕の思うところを説明するよ。加賀さんの解釈では、個々の事件から少しずつ拾い上げてそれをつなげることで犯人の名前を類推しようとしていた。でもすべてに共通している因子があるなら、犯人の署名はまずそこから検討するべきだよ。
「犯人は顔を焼いていた。人の姿を前から見てみると、おおまかに『顔、胸、腹、足』に分けられる。ここから顔を除去した犯人の意図は何か。腹と胸と足。並べ替えれば原芦宗だろ。シンプルで誰にでも思いつく駄洒落だ。それだけにもっとも署名となる蓋然性が高い。これでどう？」
　原が青木をにらみつけた。青木も見つめかえす。

　暗転。光が暗幕にあたり、文字が浮かびあがる。置かれたままになった布人形に光の一部が遮られているが、それはこう読める。

（観客）

　この二人のなかから犯人を選ばなければならない。ここで解釈に使うのは登場人物の名前だ。作者が何らかの意図をもって名前をつけていることは、容疑者二人が「名前あるいは名字が一文字」の仲間外れになっていることからも推測されよう。

青木春（あおき・はる）
加賀直樹（かが・なおき）
佐藤龍忠（さとう・たつただ）
高橋貞夫（たかはし・さだお）
中村寿阿（なかむら・かずあ）

　さて、このなかから容疑者二人をのぞいた残り四人の、名前の最後の文字をあつめてみる。きだおあ→あおきだ、となる。よって犯人は青木である。

　文字が消える。だが、幕は閉じず、劇場は暗いままだ。それでも観客たちは動かない。ざわめきひとつ起こらない。
　よくみると、観客席におかれているのは無数の人形だ。
　舞台上には、二つの布人形が向き合って置かれたままになっている。

〈了〉

春（詩）

　春　　馬来田　司馬椎

春である。
若緑の恋の季節である。
春はずるい。
なぜとは言えない。ただ、ずるいのである。
春には、野に寝転ぶのがよい。
何もせず、ただ雲を眺めるのだ。
春には、空を散歩するのがよい。
　　気の暖かさに耳をすませながら、黒い地にへばりつく愚民どもを悠々と見下ろすのだ。
春には、どこか遠くに行くのがよい。
君は今一度、春に恋するだろう。
そのずるさに悶えるだろう。

春である。
若緑の
恋の季節である。

ブランノワール（シリーズものライトノベル第一回）

ブランノワール　月見て想う

　灼熱の砂漠の真ん中に一人の男が歩いている。黒いローブに身を包んで暑そうだ。小さな石につまずいて、倒れてしまった。しかし、起き上がりもせずに呟く。
「畜生、俺の魔法は不便だな。水が出せない。何故に高速移動ができるときに街に行かなかったかね？いかに遺跡に行きたかったと言ってもなぁ。」
　この男、死の寸前である。
「誰か優しい、水を沢山持っている人が来ないかなぁ？」
　すると、頭の上の方から子供の声がした。
「怖い！怖い！怖いっ！助けたら殺されちゃうかも！」
　白いローブが背を向けてプルプルしている。白魔術師か。俺の言うこと聞いてくれるかな？見たとこ相当怖がっているみたいだな。だけど、最後の希望はこいつだな。
「あー、白魔術師だろ？水くらい出せるだろ？」
　すると、少女は立ち上がって言った。
「勿論！なめないで！」
　…いやに気前いいな。さっきまで怖がってたわりに。その子が手を下から上に振り上げる。すると、さっきまで太陽の輝いていた空が暗雲で覆われていった。少しと立たない内に雨が降り出す。天候魔法で水を操るタイプで無詠唱か。俺は仰向けになって口を開けた。水が入ってきて、喉の渇きが癒された。ここでこういうやつに会えるなんて、俺は神様に嫌われてるようだな。男は起き上がる。男と少女のいる場所は谷のようだった。砂漠で豪雨が降り、谷にいる。元川底の乾燥した土地は粘土で構成され、水を吸いにくくなる。あれ、まずくないか。すぐ横に出来た川のかさが増えていく。少女はというと泥まみれで遊んでいる。
「しまった！嬢さんこっち来い！」
　男の足元に大きな魔法式が組み立てられる。
「術式・破系・月斬屋形船。」
　男の下から黒い船が出てきた。男は少女の手を取って船の上に引き上げる。ここで二人は一息ついた。船は水に押し上げられ、川の水面に浮かんだ。白髪紅眼、どこかで見たような気がする。だけど、高鳴る鼓動がそれが望ましくないことを告げている。
「嬢さん、名前を教えてくれ。」
「この姿で言っても信用しないから、この首輪の錠前を外して。」
　俺は震える手で錠前を魔法で焼き切る。すると、少女の体がグンと大きくなった。そこにいたのは美しく輝く白髪、燃えるような紅眼を持つ、カラカラとした生意気な笑い方の美女が片膝立てて座っている。その顔を見て涙があふれ出てくる。後悔の念で。
「ヘイ、バーカ。久しいな、イアン・ガルーダ。」
「お前だったか、アズミ・デザーニャ。会えて嬉しい。」

お互いの手の握り締めあう。
「白魔術師だとわかっていながらにして助けるとは…まぁ、お前も堕ちたな。それで私は助かったわけだが。」
「確かに若い時は俺も盗み、呪い、暴力とかやっていたけどな。十八の頃に師匠に会い、加えてあの二百年前のことがあったからな。会うのはあれ以来だろ。それだったら、驚くだろうなぁ。なんか悪いこと今は一つもしてないし。」
二百年前、アズミとイアンは、国を一つ滅ぼすような戦いをしたのだ。
小さな村で慎ましく、イアンは暮らしていた。この頃、魔術師は迫害されていた。しかし、この村は貧しいのにイアンに優しく接してくれていた。家、畑等々とても親切に提供してくれた。特にすぐ隣の家の、村一番の美しい娘は優しくしてくれた。魔法を見せるとさらに見たがった。嘘のようだが本当の、旅して回った国の話を聞いてくれた。次第にイアンと娘は互いに好意を抱くようになった。
ある時、イアンは街に買い出しに行った。この時、娘が一緒に行くという申し出を断った。目を離したときに誘拐される危険性を考慮したのだが、イアンはこのことを深く後悔することになる。街からの帰り道、一緒にいた一人の男に棍棒で後ろから殴られ、イアンはそこで気を失った。次にイアンが気が付いたのは夕方だった。何か不安になって走って村に帰った。その村があったところは焼け原になっており、そこには抵抗されて死んだ、ソルテッカ共和国の兵士がいた。見渡すと瓦礫の中からうめき声が聞こえた。瓦礫をどけるとそこにはあの娘がいた。娘は肋骨が折れ、内臓が潰れていた。どう考えても助かる見込みは無かった。イアンを見て、微笑んだかと思うと眠るように息を引き取った。その死顔は安らかに眠るようだった。
その時、村の裏山からイアンを殴った男が下りてきた。イアンは言った。
『お前が俺を気絶させたりしなければ、しなければ、皆助かったんだ。全部、お前のせいだ。』
イアンは右手の平を男に向けて、一言言うと、男の顔が膨らみ始めた。男は顔を歪ませた。男の頭はついに破裂した。血が辺りに飛び散る。イアンはやや黒い透き通った魔法結晶で娘の墓を作った。立ち上がって、イアンは雄叫びをあげた。怒り、悲しみ、絶望、等の負の感情はイアンの黒魔法を化物級に変える。
ソルテッカ共和国は危機に気付いた。街など一瞬で消してしまうような魔術師が潰した村に住んでいることが判明したのだから。ソルテッカ共和国は世界中の魔術犯罪者に連絡した。奴を止められるならば罪を放免すると。軍も全て動員した。しかし、次の朝が来たときには、７つの街と村が破壊されていた。国中の人々は恐怖に包まれた。昼迄にさらに７つの街が消えた。そして１５個目の街でイアンとアズミは出会った。イアンの体からは黒い煙のようなものが立ち上がっていた。目の瞳孔は開き、その目は何も見ていなかった。
これが、最終魔術「魔人」である。
知っていたか、知らなかったか、先にアズミが行動を起こした。
『地獄の王狩りたぁ、面白いと思わないかい？イアン・ガルーダ…だっけ？』
その直後だった。イアンはアズミを掴んだとおもうと１５㎞地面を引き摺って爆走したのだ。アズミはその頃、世界屈指の白魔術師だった。何より、狙撃のうまさと威力である。通常の人なら半径五百メートルに攻撃目的で入る事は出来ない。アズミは巴投げでイアンと距離をとった。イ

アンは慣性の法則ではるか遠くに転がっていった。
『さっすがだよ！一瞬であそこまで間合いを詰めるなんて、ね！まるで獣だね。おかげで移動出来ないよ。まぁ、あんた対処しながらだと回復遅いけどね！』
　「狙撃のアズミ」その名は伊達じゃない。
『神狩りの大槍(ゴッドハンティング)まずは威力押しさせてもらうよ。』
　イアンも屈指の黒魔術師。一瞬でアズミのすぐ近くまで移動した。だが、タイミングが合わなかった。イアンの開いた口にアズミの術が入った。イアンの動きが止まった。アズミはこの隙を見逃さなかった。
『次は数押しさせてもらうよ。光流星！』
　イアンの体が大地に打たれた。イアンの眼に光が戻った。しかし、理性を持つ獣はものすごく厄介だ。アズミの体中から冷や汗があふれ出てくる。残りの魔法弾を避けたかとおもうと、アズミの紅い眼を狙ってきた。
『地動説！』
　アズミの体がイアンの攻撃を回避した。アズミはその時気付いた。自分の腕に数撃入って骨にひびが入っている。見えないほど速い攻撃があたっていたのだ。アズミは思った。さっさと終わらせなくては。イアンの口から声が漏れた。しかし、それはまだ言葉になっていなかった。目には迷いの色が生まれていた。アズミはニヤリと笑った。
『あたしの勝ちだ。』
　手を横に振ってからアズミは言った。天道術最凶の攻撃技。
『天動説。』
　イアンはアズミを中心に右側に、その他の物は左側に動いた。イアンは物凄い速さで大地を引き摺られていく。
　ついにイアンは気を失った。この戦いでソルテッカ共和国に残った街は首都だけになった。それでソルテッカ共和国は経済破綻をしてしまったのだ。
　アズミはイアンの頭を掴んで持ち上げた。イアンはうっすらと目を開けると、小さな声でなんかいった。そして、イアンはアズミに向かって微笑んだのだった。

「アズミ、これが概要だよな？」
　見るとアズミはさめざめと泣いていた。
「あんたに、そんな過去があったなんて、感動した。」
「あー、あの後何も俺言っていなかったか？手紙で書いた気がするけど…まぁ余り気にするなよ。だけど、今日は、あいつの命日だしな。」
　イアンは苦笑いを浮かべる。
　船を少しずつ北西に向ける。船が赤く光りはじめる。
「ちょ、おま！なにやってんだよ！」
「ちと墓参りに一緒に来てもらうよ。」
　船が川を飛び出す。物凄い速さで風景が流れていく。

「チッ、風情の欠片もないな。」
　アズミは舌打ちをしてぼやく。三十分くらいたった時、高い山脈が見えはじめる。イアンは船を麓に停める。そこから、イアンは歩き始める。
「ちょ、あんた、待ちやがれ！」
　アズミはひーひー言いながらついてくる。頂上は平らになっていた。そこの花畑の中央に透き通った黒い墓はあった。
「ライサ、ひさしぶり。」
　イアンは石の表面をきれいにしていく。そこにアズミがやってきた。
「『ライサ、ここに永遠に眠る』ライサっていうの。まるで寝ているようね。」
　アズミが石に触れようとしたと思うと即座に手を引いた。イアンが睨み付けたのだ。イアンは静かに悲しそうに笑うと立ち上がった。
「そろそろ決別しないといけないのかな？ライサもこんなこと望まないだろうし。今だ未練たらたらとはなんと女々しいことか。」
　イアンは空を見上げる。その後イアンは俯きながらアズミの横を通った。
「お前はどこに行く？送るぞ。」
　アズミは、イアンの背中に飛び膝蹴りを食らわせた。イアンはとっさの攻撃にすっ転ぶ。
「何すんだてめぇ！」
「過去にぐじぐじすんな！男だろうが！過去を受け入れてまっすぐ生きろや！」
　イアンは驚く。こんな奴が俺を励ましてくれた。つい見つめてしまう。
　アズミはぞくぞくした。こんなことで驚くなんて、可愛いなぁ、もぅっ！やっぱりイケメンだなぁ、このぅっ。プロポーズされたら受けるしかないじゃん。
　そのイケメン魔法使いは顎に手を当てて少し考えてから片手を上げて言った。
「そうだな、いきなりですまないが、アズミ、結婚しないか？」
「断る。」
　即答である。当のアズミの心境は恥ずかしいのやら後悔やらで、ぐしゃぐしゃになっていた。いきなりとは思っていなかった。しかし、アズミはポーカーフェイスが得意だ。ここまで動転していてもそれを表には絶対出さない。
「あんた、わかっていなくない？」
　アズミが上半身を傾けて顔を近付けてくる。アズミのシャツがはだけて胸元がのぞく。
「わ、分かっているよ？」
「あ、目が泳いだ。嘘ついたわね。」
　んな、非情な。自分のこと棚に上げて。何より、アズミに関しては二百年前の自分を止めてくれたのだ。その時からアズミは気になってはいた。この化物のような自分を受けいれられる人はもうアズミくらいしかいないのではないのかと。自分への不安をともにして。
「そうだな、チャンスだけは与えるか。二百年後に最も大きな国で、魔法大会がある。それに出場しなさい。それで、優勝できたならいいわよ。」
　楽じゃね？なんか罠があるとしか思えない。だが、挑戦しても死ぬとは限らない。

「わかった、受けて立とう。」
　アズミはふっと笑った。まるでライサのように。イアンは言う。
「改めて聞くけど、送らなくていいのか？俺は大丈夫だし迷惑なんかじゃないよ。」
「いい。ここから歩いていけるから。」
「じゃあ…気を付けて。」
「気持ちだけ受け取る。」
　イアンが麓に降りていった後、アズミはライサの墓を見て言った。
「うらやましいね。あんな男に好かれるなんて。二百年も。」
　アズミはライサの墓の上に座る。空を流れる雲を見上げて、言った。
「恥ずかしいって、不便な感情だな。」
　アズミは立ち上がる。
「嬉しい、楽しい、面白い、全て消してしまう。」
　崖の淵にアズミは行く。
「冷静に考えると、あたしって弱いね。近接攻撃が弱い。精神的にも。」
　ピョンと飛び降りる。
「じゃあ結婚するためには、夫を尻に敷くために近接攻撃を鍛え上げなきゃ。」
　アズミは空中で一回転して白い大鷲になる。
「近接攻撃を鍛え上げるなら…南西に行きゃあいいのか。」
　その時、イアンは…遥か東に来ていた。
「強く、強く、強くならなきゃ。」
　ローブの中から一つの髪飾りを取り出した。昔、イアンがライサの為に買った物である。イアンはそれを右手首に着けた。左手でそれを握り締める。
「二度と、失わないために。」
　イアンは立ち上がる。
「二度と後悔しないために。」
　まだ見えぬ街を見つめる。
「俺は最強になる。」
　その眼には強い決意の炎が燃え上がっていた。

　　神の家にて
　神の使いはこれを見ていた。
「ヤバイ、やばいよ！神様～！」
「ん？どうかしたのか？頭から光輪が落ちてるぞ。」
　使いが説明すると神の顔が険しくなる。
「激雷雲の準備。奴らを打ち殺す。」
　そう言って、因果律の部屋に行く。
「流れに逆らうのは子供の時だけにしてくれ。」

神は呟く。
アズミは前方にばかでかい積乱雲を見つけた。
「まずいなぁ、どうしよう？」
雲はぐんぐん近付いてくる。アズミは決心した。まず、急上昇する。その後アズミは人の姿に戻った。
「打ち消しゃあ、こっちのもんよ。」
右手を構える。
「神狩りの大槍」
二百年前とは桁違いの大きさの槍が飛ぶ。雲は散り散りになって消えた。そしてアズミは何も無かったかのように白鷲になって飛んで行った。

イアンは夕食中に見つけた。
「あぁ、神さんだな。」
雲と対峙する。雲は所々火花を散らしている。匙を口にくわえてふらふらと揺らす。
「飯の時に来るんじゃねーよ。ここのビビンバ熱い間に食べるのが最高なのに、冷えちまうだろ。」
イアンは両手拳を体の左右に引く。手が銀色に光りはじめる。雲が強く光った。そして、雷の柱が飛んでくる。小さな島なら吹き飛ばすだけの柱である。
「これやると今日はろくな魔法使えないな。俺オリジナルの遠距離攻撃、受けてみな。」
肩をコキッと鳴らした後、体の前で右拳を上に、左拳を下に手の甲をそれぞれ外になるように重ねる。
「重力大宝・銀河砲」
柱ごと雲は消えた。散り散りになったのではなく、消えたのである。
「弱っ。ヤリ損だったな。おばちゃーん、スープおかわり。」

神は驚く。またもや現世からあの二人に因果律を動かされた。どんなに押さえても、動かされる。　神は頭を掻くと呟いた。
「諦めよ。」
「神様、駄目です！」
神は、ウルセェウルセェ言って奥に入っていった。

そして二百年後

とある臨海都市、バナテア。様々なものが行き交い、沢山の出逢いと別れがある。そんな街の一角、酒場が並ぶ通り
「よい通り」
酔いと、宵まで飲み続けるのをかけた名前だ。
その中の一つ、マーキュリー。そこに、伝令が一つ届いた。それは、下手すれば店じまいも覚

悟しなければいけないことだった。その男は息を切らせて伝えた。
「〈女王〉が来るぞ！」
　いきなり、店中が騒がしくなる。唯一、店主はカウンターに手をついて大きくため息をついた。
「久しぶりだな」
　こいつほど酒に異常に強い女性は一人としていない。その飲みっぷりは見る価値がある。だがこの女、なにぶん金が無い。そのため２ヶ月に一回しか来ないのだ。それこその希少価値である。
「ハロハロ！」
　扉が吹き飛ばされる。純白のワンピースに、白い髪、紅眼。やや釣り目の絶世の美女。何も知らない人は鼻で笑うが、この女性こそ、〈女王〉こと白魔女アズミ・デザーニャである。王の凱旋のように店のカウンターへ直行すると、肘をついて、
「グランドクラスの酒、マインドホップ二樽くれ。」
　マインドホップ、常人が一口飲むと一年酔い続け、その間の記憶が全て無いという銀色酒である。余りの危険度のため、扱える店も限られている。店主は一息つくと、高さ１メートルの樽を２つ奥から運んできた。アズミは金貨をざらざらと出す。
「市場価格の1.5倍だから足りるよね？」
「一気に飲むなよ。」
　忠告ではなく、売る側としての儀式のようなものである。
「あたしにそれ言っても無駄だよ。」
　早速、一つあける。樽を持ち上げて飲みはじめる。周りが「オォ」と感嘆の声を上げる。まぁ、こんな高級品を豪快に飲む人は世界中でも少ないだろう。半分ほど空けたところで飲むのを止めた。プハッと一息つく。流石に一気飲みはできないらしい。
「アズミちゃん、結婚は考えないのかい？もういいとしじゃないか。」
「まぁ、好きな人はいますよ。ただ、私が恥ずかしがり屋なもんで、告白された時に、条件出しちゃったんですよ。」
　アズミはタハハと笑う。酒場にいる人々は全会一致で「恥ずかしがり屋」を否定する。そりゃこれでも滅茶苦茶にモテモテだ。すれ違う男の９割が三度振り向く。ほぼ毎日、貴族からの求婚があったりと、大変である。
「それじゃまたいつか。今度はチャーナの黄金不老酒お願い。」
　それだけ言うと、外に出た。直後、黒いフードをかぶった男とぶつかった。飲みかけの高級酒は全て外に出てしまった。
「てめえ、あたしの酒返せ！」
「…これで勘弁してくれないか。」
　男は瓶を取り出した。中には500ミリリットルぐらいの液体がはいっている。アズミは訝しげな顔でその瓶を睨む。ふざけていたら、殺されるのではないかと、思うようなにらみ方だった。
「なんだこれ？」
「ゴッドクラス、通称Ｘ（エックス）、クシロニファン。不服ならばまだ、ほかのモノもあるが。」
　アズミの顔に笑みが溢れる。こいつが出したのは、自然酒、人の力では作り出せない酒。ゴッ

ドクラスの酒泉には、大体、質の悪い召喚術式が仕掛けられている。ふたを開ければ龍という具合だ。だからこそ、天然の酒は相当の高級品である。全てファイナルクラスかゴッドクラスに分類される。アズミのようにギルドのアルバイト生活をしている者に手に入る値段じゃない。それをただでくれると言うのだ。
「いやはやありがとう。これから一緒に飲みに行かないか?」
「…いや…それはちょっと…」
　その男が後ずさりながら躊躇していると、風が吹き男のフードを開いた。黒髪、黒眼の顔が現れた。それを見て、アズミは満面の笑みを絶やさないまま、一瞬で怒りに満ちあふれる。アズミは手を後ろに引く。
「七天・神羅万掌」
　簡称呪文、長い呪文を別構築でまとめて短くしたものだ。手が青く光る。男は下に張られた無唱結界で指一本さえ動かせない。
「お前は死んでろ、イアン！」　男に拳がたたきこまれる。アッパーで約200トンの力だから、男は上に吹き飛ぶかと思われた。しかし、1メートル後ろに引き下がっただけだった。
「コノヤロウ、重力魔法使いのこの俺、イアン・ガルーダを舐めんな！」
　男の名前はイアン・ガルーダ。過去にアズミに告白して、条件を出された男である。せっかく会いに来たのに、こんな形でしか答えられないアズミもアズミである。
「じゃあ、久しぶりだし、俺とちょっと握手(笑)でもしようか。」
「あたしからはプレゼント(笑)があるのよ。ちょっと受け取ってもらえる？」
　互いに足下に魔方陣が錬成される。どんどんギャラリーが集まって来る。力の加減次第では、人を殺してしまう。だけど、相手をダウンさせられないかもしれない。ここが技術の見せ所だ。イアンは左手をすっと差し出す。アズミは両手のひらを上に向けてから重ねる。
「重力気功・一点爆掌」
「恋女封術・貴方のことがDIE好き☆DAETH」
　イアンの腹の中で、大砲が爆発したような衝撃が発生した。同時にアズミの足下の地面が大きく抉れる。互いの体はミシミシと悲鳴をあげる。普通の人ならどちらの体も原形をとどめない。
　数秒後、互いの術が解ける。睨み合ったまま互いに立ち尽くす。刹那、アズミが気を失って崩れ落ちる。間合いを一瞬でつめて、抱き抱える。イアンは考える。力と技術だけならアズミの方が圧倒的に強い。軍配はアズミに上がるはずだ。そこでふと気付いた。もし、互いの精神力も勝負の決め手だったならば、アズミは不利だ。出られなくても、毎日が楽しかった家が…兄と自分だけを残して燃えて無くなる。それは幼い心に尋常じゃないほどの深い傷を負わせただろう。ため息をついたら、イアンはアズミをしょいあげた。
　アズミは小さな部屋で目を覚ました。その部屋はベッドだけしか置かれてなかった。家族一緒に屋敷で住んでいた頃の自分の部屋と同じくらいの広さだ。
「あんな昔のことなのに…」
　寒気を感じ、体を震わせる。最近はギルドで忙しかったせいか、すっかり忘れていたのに…こんなところで思い出すなんて。
「こうしててもなにも変わらんな。ひとまずここがどこだかわからないとな。」

　ベッドから這い出て、自分の所持品が一切無くなっていないことを確かめる。懐からクシロニファンを取り出し眺める。
「初のゴッドクラス。一口だけ、それならいいっしょ。」
　アズミは一口、もとい口いっぱいにクシロニファンを飲む。満足した顔で後味を楽しむと、慌てて酒の残量を確かめる。しかし、酒は一切減っていなかった。
「あいつ、瓶に空間増設をかけやがった。」
　ま、いっか。と笑うと、ぐびぐび飲みはじめた。クシロニファンはいくら飲んでも酔わない。満足すると、アズミは部屋を出た。長い廊下の端に部屋は位置していた。そこで気付いたがこの屋敷無茶苦茶にでかい。廊下の端と端のちょうど中間に壁が無いところがある。恐らく階段があるんだろう。絨毯さえ引かれておらず、ひどく殺風景に感じた。
　その時、一部屋の扉が開いて、メイド服を着た少女が二人出てきた。一人は16歳くらい、もう一人は5歳くらいである。突然、パチッと16歳くらいの少女と目が合った。すると、少女は慌てて階下に降りていった。幼女も一回転んで、後を追い掛けていった。かわいいから追い掛けよう。走りやすいようワンピースの裾を持ち上げて走る。
　下の階は二階よりも広く作られていた。また気付いた衝撃の事実。この屋敷中庭まであるよ。なんか、金持ちに拾われちゃったな。
「そういえば、ここって誰の家だろう？イアン？でもあいつこんなロリ趣味ないだろうし…。」
　突如、目の前の扉が開いた。スカートの裾を持ち上げて一礼する。出てきたのは恰幅のいい初老のおじさんだった。
「居ても迷惑では無いから、いつまで居ても結構だよ。」
「では、お言葉に甘えますわ。」
　こいつイアンだ。右足に強化魔法を無詠唱でかけて、首を刈る。単純な威力強化だから、凡人だったら首の骨が折れて、衝撃波で脳が細切れになるくらいだ。おじさんは左手一本でアズミの一撃を止める。
「予想、イアン。」
「ご名答。」
　イアンはバリッと変装魔法を解く。アズミは腰に手をあて、頭を掻く。どうやら、戦闘中にふとイアンを兄貴に重ねたところで気を失ったらしい。なんで、あんなこと考えたのやら。まぁそんなことよりも、訊きたいことがある。
「外も見たけど、この幼子たちはなんだ？まさか、お前の新しい趣味？」
「んなわけねーだろ。ここにいるのは、親がいないもしくは捨てられた子供達だ。それを引き取って、独り立ちできるまで育ててやってんだ。」
　少し感心した。イアンはそういう事までするようになったのだ。悲しい目をしてた昔に比べたら随分いい成長だ。サッと頭を抱き寄せてなでくりまわす。イアンは抵抗するが、無詠唱強化魔法で16777.216kg(アズミの元の腕力の16777216倍)まで強化した腕力の前ではイアンは無力だった。膨れっ面をして大人しくなる。アズミが追い打ちをかけるように
「疲れちゃいまちたか～？」

　イアンの頭の中でブチリと何かが切れた音がした。イアンはスッと右手を出した。そこには、銀の指輪がはまっていた。そのままその手でアズミの顔を掴む。
　すると、アズミの体は糸が切れたみたいに崩れ落ちる。なんとか座れるみたいだが、呼吸は苦しそうだし、目以外の体はびくとも動かない。
「強化三昧はこうなるんだ？」
「お…お願い、ゆる…ハァ、ハァ…許してぇ。」
　涙がぼろぼろ出てくる。パッと、手を離しても、しばらくアズミはその場に座り込んで、息を整えていた。
「仙骨、腓骨、頭蓋骨にひび。大腿骨、肋骨、上腕骨に骨折。」
「すぐ治せるからいいだろ。」
アズミはちっ、と舌打ちをした。
「いくら自身に銀が効かないとはいえ、他の魔術師対策はセコいぞ。」
「俺は鉄が効くぞ。弱点を教えてやったぞ。」
「あんた、それでも体術で対処すんじゃん。」
「あ、あの！」
　すっかり彼女達を忘れていた。恐らく、ついていけないやり取りだったのだろう。まぁ、人間の限界を超えたやり取りをしていたからな。ふと、焼きたてのパンのような匂いが漂ってきた。
「朝食の準備が出来ました。こちらにどうぞ。」
　朝食か、そんなに精神に来てたのか。つくづく自分の弱さに呆れる。
「俺も連れていけよ！」
「わたしはアズミさんと会話したいの。『父さん』は黙ってて。」
　舐められ切ってるな。互いの関係は家族みたいなもんか。ま、子供は好きだからいいけどさ。こんな家買う金あいつ持ってたんだな。少し感心。ほとんど若き頃の時効の切れた略奪なんだろうが。
「最近真面目にギルド回って見つけた、最難関クエストのものも入ってるよ。」
「だからってうちのところまで来ないでくれる？おかげでマインドホップ買うのに二カ月かかっちゃったじゃん！安酒は体に悪いんだよ！」
「酒の飲みすぎはそれだけで体に悪いけどな。アルコールの過剰摂取は避けましょう。」
「いいよ、アズミさんもう行こう。」
　少女がせかす。イアンは拗ねたように自室に入って行った。食堂に行く間、色々な話をした。
　少女の名前はリリア＝ティアシム。年齢は十八歳。『長女』として毎日奮闘中だそうだ。
「ほんっと、父さんはだらしないの。部屋の片づけするときに、丸三日はかかるし。『昔は旅ばっかだったからなぁ』とか言ってるけど、絶対嘘だよ。」
　一応本当です。ただ、あいつは全て途中で手に入れるやり方だから。ま、信用されないわな。
　食堂に入ってビビった。そりゃ、うちのギルドにはすごい魔法を使う人がいる。そのバリエーションは市場に売ってる食品の品数を超えるくらいだ。だが、一応全て人間だ。ここは龍人、神子などなど、人と他の種族のハーフが殆どだ。よくよく眼を凝らせば、確かに人の子もいるのだが。呆然とした顔でリリアを見たら、察したらしい。

「私はエルフと龍人のハーフです。」
　恐ろしいハーフもいたもんだ。最近は種族間の結婚も増えたから、このような子は多い。だがその反面、親が手に負えなくて捨てることも多い。
「まあ、そんな奴らでも俺は喧嘩で魔法使わずに勝てる自信があるけどな。」
　いつの間にか、イアンは後ろに来ていた。
「飲み物は俺が注ぐから、リリアは盛りつけてて。」
　イアンは棚から十何個ものコップを取り出してそれぞれに違う飲み物を入れていく。何でみんな水にしないんだろう？何か特別な日なのか？今日。
「ほい、みんな自分の席につけ。リリアはこれ。シュートはこれ。カサラはこれ。…」
　と一つ一つ配っていく。リリアの飲み物からはシュウシュウと嫌な音と臭いがしてくる。どう見ても飲んだら神様の厄介になる。
「イアン、これ何？」
「？知らないのか？強酸性の有名な飲み物『ルート２』だよ。飲もうとか考えんなよ。そんなのに耐えられんの龍の血引いてないと無茶だから。」
「試したことあんの？」
「うん。」
　よく死ななかったな。なんか感心する。ふと、自分のコップに注がれた飲み物をみる。黒いビールが泡を立てている。
「『ハードクロウ』感謝しろよ。わざわざ開けたんだから。」
　なんちゅう気前の良さ。グランドクラスの酒をわざわざ開けるとは。やっぱ、最近最難関クエストが無いのこいつのせいだな。断定、はっきりわかるんだね。
「じゃあ、あーうん、頂きます」
　直後、大皿が宙を舞う。一気に子供たちが皿に飛びかかったせいだ。やっぱ、凄いな。人とエルフは様々な生物の中でも小食だと聞いたことがある。見ると、リリアはあまり食べていない。汗を流して青ざめてる。
「……お父さん、水くれる？」
「ルート２を飲んでからだ。好きな飲み物だろ。」
　なおもリリアは具合が悪そうだ。
「しゃあない、じゃあ一つだけ答えろ。」
　リリアの顔がぱっと明るくなる。しかし、イアンは驚くべきことを言った。
「どこの魔術師だ。」
　食卓が一気に沈黙する。子供たちは一斉にリリアの方を見る。リリアは何が何だかわからない顔だ。
「何言ってるの？こんなに長い間一緒だったのにわかんないの？」
「答えは三秒後。３，２，１」
　途端、玄関の方からドデカイ声がした。
「たっだいまー！父さんいるか～？」

「リリアは放蕩娘だ。十か月も家に続けているはずがない。」
　食堂の扉が勢いよく開いた。巨大なリュックサックを背負ったリリアが満面の笑みで立っていた。
「え、ちょ、誰こいつ。」
　笑みがもう消えた。
「殺しておＫ？」
「あー…多分無理だよ。」
「そういわれないように、私も頑張ったんだよ。少しならいいでしょ！」
「あー、もう、うん、いいよ。」
　リリアはスッと息を吸った。リリアの身体中から湯気が出てくる。それを見た偽リリアは立ち上がると外に飛び出した。それを追い掛けてリリアが食堂を飛び出した直後、リリアの口から聞き慣れない魔法が出てきた。
「絶対正義の焔龍咆哮」
　イアンの動きがピタリと止まる。外がかっと明るくなり、屋敷全体を揺るがす轟音がなった。子供達は怯えている。自身の株を上げる努力はしてみるか。子供達を抱く。
「大丈夫だよ。」
　確かに泣き止んだが
「お姉さん、酒臭い。」
　アズミは部屋の角で丸くなっていじける。
「分かっていたとも。ええ、ええ、でもさ…」
　其の間にも外で爆発音は鳴り響き続ける。急に止んだかと思うと、リリアがふっとんで食堂に放り込まれてきた。だが、その目はあきらめていなかった。
「３、２、１、GO轟」
　外からまたもや一つ大きな音が鳴った。見ると、庭の中心で消し炭がぼろぼろに崩れていた。
「父さん、あれ肉体人形だった。」
　灰だらけのリリアが戻ってくる。だが、根本的な疑問が残されたままだ。
「イアンはいつごろ気づいてたの？」
「結構前から。だけどリリアなんかより良く働いてくれるから、放置してた。」
　それより、とリリアに向き直る。
「よく、あいつが黒魔術師だってわかったな。」
　リリアは固まると、汗を滝のように流し始めた。
「ぐぐぐぐぐぐ偶然だし？ベベベベベベ別に旅で覚えてきた、とかじゃないし？」
　なんちゅうわかりやすさ。イアンは額を抑えてため息をつく。まるでわかっていたかのような素振だ。
「どうせいつかは、自力でやるだろうなとは思っていたが、龍魔法とはおもわなかったぞ。あんな難しいもん。俺だってできないし。覚えるとしたらエルフ系かと思ってたんだけどなぁ…」
　リリアは目の前で指を振る。チッチッチッ、と言うと、イアンに原子爆弾級の言葉を放った。

「好きな人のためなら、女はどこまでも強くなるのさ。」
　イアンがまたもやピシリと止まる。今の発言は好きな人がいるということだ。父親代わりとしてリリアを育ててきたイアンとしては死刑宣告も同然だろう。ま、それが娘が父親を嫌う一つの要因なのだが。こいつはどう出るか見ものだな。
「名前は？」
「ラーグ。ラーグ・ファントム・シュトラウス。父さんに少しだけ似てた。」
　今度はアズミが固まる番だった。その名前、ちょっとヤバいんじゃないかな？自分の覚え間違いを、強く、願う。
「聞いたことないな。じゃあ年…」
「それって、『全王・ラーグ』？」
　リリアは無言で頷く。おいおいおい、そりゃあ凄過ぎだよ。玉の輿なんてものはほんとにあるんだね。
「ちょちょちょ、全王ってなんだよ！ついていけないうちに話進めんのはやめてくれ。」
「え…あんた知らないの？次期魔導王になる人。最近話題の人よ？彼女が…い、る…」
　リリアは自分の拳で自身の頭を軽く小突いて舌を出した。あ、こいつのことか。まあ、姿は人とはかわりないしいいのか。イアンを見ると、眉をしかめてた。
「なんかやな予感がする。ちょっと会わせてほしい。」
「？…まぁ、いいと思うけど。多分父さんより強いよ。」
　あ、それ言うとイアンは燃え…ていない？イアンはまだ眉をしかめている。何か思い残しがあるかのように。
　数時間後、マーキュリーで待ち合わせということになった。イアンは何を考えているのか、爪をガシガシ噛んでいる。
「相互伝意術式まで結んでいるとは、どういうやつだよ。」
　だから、次期魔導王だって言ってんじゃん。それに、仲のいい最近の男女だったら、ほとんど式は結んでいるし。この突っ込み何度目だと思ってるの？と、心の中で説教する。実際に言っても、こいつには無効だ。気付けば、周りには人垣ができている。私が酒を豪快に飲むとでも思っているのだろうか。
「あたしゃ、今回は酒飲まないよ。あきらめろ。」
　一気に人たちが離れていく。あたしの魅力は酒の飲みっぷりだけですか。少し萎える。目をつぶって天を仰ぐ。だが、それでも声をかけてくる人はいるものだ。
「『女王』のアズミ・デザーニャさんですね。」
　？
「ラーグです。」
　アズミは目を開けた。バチンと音が鳴るのかと思うくらいの勢いで。確かにその顔は
「イ…アン？」
　いや、よくよく見ると結構違いがある。イアンの髪は直髪、ラーグは少しカールしている。頬もふっくらとしており、目には純粋な光（イアンは疲れ切った眼）、身長はアズミと同じくらい。服はイアンの黒に対し、蒼を基調とした金糸縫いの豪華絢爛な服。さらにはイアンじゃありえ

ない薄笑いまで浮かべている。確かに別人だ。
　だが、似すぎだ。アズミは思う。世界には自分とほぼ同じ人が三人いるという。こういうことが、あったっておかしくない。慌てていた思考は落ち着いてくる。これを、アレに会わせていいのだろうか。幸運なことにまだイアンは気付いていない。だが、運命の神は残酷だ。店の扉が開いて、大きな声がした。
「ごっめーん！綺麗な服がなくて、探すのにてこずってさ！」
　確かに、龍人の特徴である鱗のように輝く肌に、エルフの特徴の端正な顔は白い無地のワンピースに映える。だが、今そのノリは危険だ。
「おお、リリ…ドッペルゲンガー？」
　自分なら気付こうぜ！だが、そんな考えも見事にかき消えた。
「お初にお目にかかります。兄さん、ファウスト・トルフェイ・シュトラウス。」
　そんな壮大な、暴露から、因縁は幕をあけ
「何言ってんだ？おめぇ？」
　初っ端から、イアンは破格の反応を示した。薄々、言うだろうとは思っていたが。孤児院暮らしならば、名は、院長がつけるもの。それこそ、自分の名は感謝するべきもの。ほかの名前は知らない人扱いだ。それに、確かこいつの魔術源は
「おれの名前はイアン・ガルーダだ。それに、お前の話だとファなんちゃらかんちゃらは、魔導王の子なわけだろ？だったら、幼いころ魔法が使えなかった俺は違うんじゃないか？俺は『賢者の石』由来の魔法だから。」
　次期魔導王は前髪を掻き揚げて、鼻で笑った。あ、うぜぇ。でもこれは、少なくとも親戚の線はありそうだけどね。これだけ似ていると、どう考えたってねぇ…
「お父様は言っておりました。お前の兄は生まれたころ魔力がひとかけらもなく、王の名誉が汚れるのを恐れ、捨ててしまったと。」
「俺のことを捨てたなら、それこそ俺の親として認めないね。リリアの交際相手は誰かと思えば…」
　一間
「二年前俺と相対して、全力を出す前に負けやがったやつとは。『お初にお目にかかります』じゃねぇな。俺が忘れたとでも思ったか。」
　ラーグが下唇を強くかむ。話についていけないリリアはオロオロしている。いやな沈黙が間に流れる。これはあたしがやぶらなくては。
「あ、あのさイアン？その頃はこの子は十四でしょ？しょうがないような。」
「俺をドッペルゲンガーだと決めつけたうえに勝てると思い込んでた。だから、制裁を与えてやったんだ。当然のことだろ。」
「当然なわけが…」
　あ、あたしならやりかねない。まぁ、こっちにもプライドってもんがあるしね。ここはイアンが勝ちということで…

刹那
目の前が蒼く染まった。直後、目の前から黒い人と蒼い人が消えた。と、それを脳を認識する前に、蒼い光と黒い穴がぶつかって……
まぁ、うん、酒場が吹き飛んだ。この間０・０００００００００１秒
リリアの龍脚走で、客と店員は避難できた。あたしの再生で商品と建物は大丈夫。初見なのにすまんが、馬鹿二人は知らん。だが、馬鹿は馬鹿。死ぬまで治らん。あたしが転送した、砂漠のど真ん中でドンチャンしてやがれ。と、爆音が聞こえてきた。おい、あいつらのいるところ三国は遠いぞ。それが少しずつ近づいてくる。あ、まずい、この速さだと絶対ここくる。三秒後、ガチギレしたラーグと、ニヨニヨしたイアンがアズミの前に土煙を上げて滑り込んできた。
「ラーグを抑えろ！」
イアンはそのまま一人でラーグを抑えた。言い恥。へっざまぁ。だけど、随分と焦っているような気がする。
「リリア、こいつに抱き着いてやれ。それぐらいしか落ち着かないと思う。」
…俗にいう荒療治だな。リリアが抱き着いたとき、ラーグの精神が乱れて一気に止まった。
「あのころから十分に強くなったとは思うけど、まだまだだな少年。じゃあ次は大会でな。」
恥ずかしさと怒りと悔しさで凄い顔になってんぞ、少年。と、角を曲がったとき、大きな泣き声が聞こえてきた。
「うっふえええええええええええええええん！！！！！！！痛かったよおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
ラーグの声に聞こえるのだが…。イアンを向くと、
「……！」
全身に闘志を滾らせていた。火を使うわけではないのに、体から湯気が上がってる。戦っている間に何か見出したか。
「どうした、そんなにやる気ガンガンで。」
「いいニュースと悪いニュースがある。」
「いい方から」
「神格武装・刀が頂・黒刀 獄喰（ごくじき） をサーチした。」
「あたしは光弓 神射落（かみいてのおとし） しか神格武装には興味ないし。で、悪いニュースは？」
「あいつ、『はじまり』が使えるだけの実力もっていやがる。」
『はじまり』。それは白魔術にして、人を殺すことのできる唯一の魔法。魔力は喰うし、出す側も無事じゃすまない。だが、その相手を存在しなかったことにできるのは強力だ。まだ、『始祖』と呼ばれる、最初の魔法使いしか出せたという記録は残っていない。噂によると、未だ見つからない魔導書がないと使えないとか。それが
「『はじまりの書』がないならいいっしょ。」
「あ、まあ…ね。…あ、『終焉の書』欲しいな。」
アズミはビクッとする。なぜにここで最悪最恐の黒魔導書が出てくるかな。まだ『煉獄の書』、『大地の書』、『水華の書』なら手に入れるのに手伝ったかもしれない。だが、

「絶対に協力しないからな。あんな死を呼ぶ書物なんて。一人でやってくれ。」
「いや、欲しいって言っただけで、手に入れるとか言ってねえし。」
　いきなり、眼の前に人が現れた。いや、土煙から見ると上から落ちてきただけなんだろうが、残像さえ見えなかったって、どういうレベルだよ。普通（この世界に「普通」が通じないのは百も承知）体がぐしゃぐしゃになるぞ。
　落ちてきたのはぼろマントを身に着けた白髪の老人だった。只者ではない威厳だろうか？そのようなものが感じられて、アズミは臨戦態勢を取る。
「じいちゃん？」
　こんな形で解かれた。イアンがそんなことをいうとは思わない。イアンの顔が少しづつ明るくなっていく。そしてその顔が、確信をもって叫ぶ。
「じっちゃん！」
「久しぶりだな、イアン！」
　二人は抱き合う。突然（いや、前々からか）私は蚊帳の外に放り出された。そんな私を引き込んでくれたのは老人だった。
「おい、こいつはお前のなんだ？娘か？」
　おい、どういう見積もりだこのジジイ。確かに、こいつが二十歳ぐらいの頃に子供がいたとしたら、今は、墓石の下の白砂になっているだろうしなぁ。でも、流石に屈辱だ。
「紹介するよ。今話題ののんべぇ白魔女。アズミ・デザーニャ。」
　おい！
「こっちは俺の師。黒魔術師サタン・ディアボロ・シュトラウス。」
　おっい、ちょっとまてぃ！シュトラウスって言ったな！？言ったな！？間違いなく王族だよなぁおい！だが、二人ともそんなことはどうでもいいかのように話を進める。
「で、じっちゃんは何のためにきたのさ。ただ偶然ってわけじゃないでしょ。」
「まあな、お前、５００歳超えたじゃろ？だからというかお祝い。ホレ。」
　と、サタンは懐から漆黒の本を一冊取り出す。紙も黒で、制作年が１０００以上前なのに、汚れも傷も撓みも無い。だとすると、
「『終焉の書』？いいのこれ？《アヌビスの迷宮》でデッドヒートして手に入れた逸品じゃん。」
　迷宮内でデッドヒート？なんちゅう余裕。
「いいんじゃよ。その中の魔法より儂の方が強いから。それに、今のお前だと、起動できない。」
　あ、だめだ。あたしは自分のことを最強の魔法使いの一人だと思っていたが、最強には経験が足りない。この二人を見てるとそう思うしか無くなってくる。イアンなら使いこなせると思ってんだけど、見積もり違いかね？
「じゃ、今度儂はそろそろ行くよ。お邪魔していても悪いしな。」
　ひゃっひゃっひゃと笑うと、どこかに消えてしまった。何だったんだ。台風が通り過ぎたような感覚だぞ。最近自分より年上の人に会っていなかったから、新鮮だった。が、恐怖も同じように感じた。ヤダナァ。イアンはサタンに言われたことに腹が立って仕方ないらしく、歯ぎしりを

している。ま、イアンでも勝てないとわかるような、黒魔術師なんですね、と。
「まぁ、良かったじゃん。身内からタダで貰えたなら。無駄な苦労しなくて済んだんでしょ？」
「…メなんだ。」
　ぼそり
「え？何？」
「ナメられた気がすんだよ！このまま引き下がっていられっか！今すぐ獄喰を取りに行くぞ、ゴルァ！」
　直後、アズミは首根っこを掴まれ、引っ張られた。そんな、子供のような負けず嫌いを見て、アズミは「くすり」と笑う。体制を立て直して、イアンと並走しながら言う。
「じゃ、こんど神射落を取りに行くの同行してもらうからね。『天空の祭壇』にあるらしいから。どれだけあんた耐えられるかな～。」
「…了解。ちなみに獄喰の場所は『龍口洞』の最深部が入口の『玄龍転生の地』のさらに奥『無堂』の中心部にあるから。」
　なぜに、神々の激戦地とも呼ばれるとこに行かねばならんのだ。まぁ、こんな無茶なやつだから好きなんだけどさ。自分のイカレ具合に苦笑する。

この時、私たちは知らなかった
その無茶ぶりが
いかにイカレていて
いかに大きなことで
いかに世界を変えるものだったか
私はただ
横のイアンと
吹き抜ける風に身を任せていた

そんなことも
いまや
後の祭りだ

「あとがき」だぎゃあああああ

　うわ、痛い。あ、別に虫歯とかじゃありませんよ。これ、締め切りを大幅にオーバーして初稿提出ですからね。いい作品にもならずにすいません。

　さて、この作品、固有名詞多すぎですね。自分の頭の中になら物凄い細かい設定がありますけど。わかりにくいものを少し説明しますね。
・術式　　これは、東洋の魔法の中で、ある一定の陣を組んだ上でできるものです。月斬屋形船は中位なので、血管を陣として利用しています。西洋の魔法陣に比べると構築が楽なので愛用しています。
・魔人　　魔力を使いすぎると、体が無理に順応しようとします。その結果、細胞変質などで異形になることも。こう考えれば、アズミの力加減はうまいということになりますね。
・酒　　アズミのエネルギー源ともいえるもの。六段階ぐらいにクラスがあり、最高級のものは、樽一つで会社を一つ買い取れるくらい価値があります。また、自然界で沸いている酒もあります。それの一つがクシロニファンです。
･銀　　ほとんどの魔法使いの敵。魔法力を根こそぎ奪っていく物。身にくっついただけで奪われる。イアンにとっては鉄が該当する。因みにラーグは銅。
･他種族　　人ならざる者。迫害の対象であり、ハーフの孤児にはほとんど貰い手はつかない（イアンは別）。ただ、魔力は人より強いし、力もあるから一部のギルドでは正式メンバーとして活躍している。
･魔導王　　西方魔法協会の頭領。協会の中では家系の血によって最強となっている。国の王と同等の権力を持つ。イアンとアズミは協会に入っていないので、「魔導王最強」の例外。
･賢者の石　魔力強化系の魔法具中最強の代物で、複数個ある。子供の頃イアンは偶然これを食べてしまった。
･神格武装　武器の中で、一騎当千のもの。例えば獄喰は振ると、切り口からそのものが消し飛ぶ。その強さから、大体けったいなところに封印されている。
･魔導書　　魔力強化系の魔法具。それを持っていないと使えない魔法もある（例・はじまり）大体魔法種別にある。
･玄龍　　龍の中で最初の龍。見た人は死ぬと言われている。
　と、こんなところですかね？重要なのはこの後だから、つまらないと思っても勘弁してください。読んでくださってありがとうございます。

その人々に（小説）

その人々に　やくると

○

人形の家。

○

書庫に入ると、今日もお母さんがいた。

最近夜に一人で書庫に行くと、お母さんがいる。お母さんといるのは、安心するような怖いような奇妙な感じだ。お父さんが書庫を使わないのをいいことに、いつまでも二人でいる。お母さんも別に邪魔だとは思っていないようだ。

実のところ、お母さんがぼくに気がついているのかどうかすらよく分からない。お母さんはぼくには一切注意をはらわず、ずっと本を読んでいる。ぼくの方はお母さんというものに興味があるので、本を読むお母さんをいつも観察している。

お母さんの顔は髪に隠れている。髪は肩までしかないからそこまで長いはずもないのだが、ぼくがどんな角度から覗きこんでも、どんなに目を凝らしても、なぜか顔は陰に隠れたままだ。ただその顔が、覗きこむぼくではなく本のページに向いていることは分かる。

しかし本に集中している、という様子でもない。身じろぎもしないお母さんは、人形か何かのように感じられて、中身は空っぽなのではないか、と感じられるのだ。ただ、指は動いているように見えないのに、本のページだけは定期的にめくられていくことで、どうやら人間らしいと思わせる。

お父さんにはお母さんのことは話していない。お父さんはぼくに「お母さんはいない」ってことだけ教えてくれた。死んでしまったのか、いなくなったのか、あるいはぼくは捨て子でお父さんが引きとったのか。理由は教えてくれない。そしてお父さんは、ぼくが他のみんなと違ってお母さんというものを持たないのを気にしているんじゃないかと、口には出さないけど、心配している。だからぼくがおかあさんの話なんか始めたら驚いて、きっと悲しむ。

もし死んだのならば書庫に現れるお母さんは幽霊ではないか、と想像しているけれど、たぶん違う。もしそうなら、きっとこの人はお父さんに会いたいのではないだろうか。お父さんが入ってこないと分かれば、書庫をでていくはずだ。

おそらく、この人は「ぼくのお母さん」の側面しかもたないのだろう。「妻」であるとか「女性」「人間」であるとかいったものが、お母さんという側面以上に重要な本体が、欠けている。たぶんそれは、ぼくがお母さんというものをしらないからだろう。だからお母さんは書庫で本を読むだけなのだ。

ぼくは呼びかけたりはせず、ただひたすらお母さんを見つめ続ける。お母さんはページをめくる。なんの本なのだろう。いつも同じ本を読んでいるように見えるけれど、表紙は無地だし中身はよくわからない。

○

そして扉が閉ざされた。

○

授業中に寝た僕は夢を見る。夢の中でも僕は授業を受けていて寝ていたのだが、何かの音がして夢の中の僕は目覚める。その金属音は教室の中のどこかから聞こえてくるようで、それを聞いているとなんだかひどく苦しくなる。苦しいままで僕は授業を受けていたのだが、教師の話を聞いていると「筋紡錘が骨格筋一グラムあたりｘ＝２の二次関数とするとシーマイナーメジャーセブンのゆで方は根本三十秒、全部つけて十秒、一秒に三三一プラス気温かける〇・六メートルはひとりの修羅なのだ」などといっているのでこれは夢だと気がつく。それにしても自分がこんなに授業をしっかり聞いていたとは思わなかった。あるいは睡眠学習？

夢だと気がついた僕は、もう教師や楽しそうに喋りまくっている他の生徒たちを気にしない。席を立って、金属音がどこから出ているのか探す。はやくこの音を止めなくちゃ。

教室を歩きまわる僕をだれもとがめない。まるで僕が存在しないみたいに授業はつづけられる。でも、僕はなかなか音が出る場所を探り当てることができない。音が複数の場所から出ているのだ。そして僕は、どうやら金属音は、教室にいる僕以外の人間から出ているらしいと気づく。

そのとき生徒と教師がいっせいに僕の方を見る。そして僕に向って無数の鐘を投げつける。金属音が鳴り響く。鐘はいつまでたっても鳴りやまない。投げつけられる鐘の方もいつまでたっても途切れる気配はなく、床が鐘で埋まりはじめる。

とうとう鐘は投げられるまでもなく空中を飛びまわるようになって、あっという間に教室は金属音で覆われる。僕は焦って教室を飛び出すが、教室からどんどんと鐘があふれてくる。他の教室からも鐘があふれていて、学校中に金属音が鳴り響いている。一階へ向かう踊り場で、とうとう僕は顔だけ残してとびまわる鐘に埋まる。鐘の重みと金属音で息が詰まりそうになるが、しかし苦しいばかりで気絶もしない。

僕のまわりにさっきの教室の生徒たちが集まってくる。そのうち十人ばかりのまわりを鐘が飛び交っていて、他の生徒は鐘にあたらないように少し離れている。そいつらが手に持った鐘を振ると、僕は鐘ごと一階に転がり落ちる。ごろごろと僕が転がるとともに僕を埋めている鐘が大きく揺れ、またも金属音の大合唱。頭が割れんばかりに痛む。

「さあ皆さんご一緒に！」と十人のなかの一人が叫び、生徒たちは異口同音に言う。ある者は嬉々として声を張り上げ、またある者は仕方がなさそうに。

『この世界に秩序を。我らに力と安寧を。そのために子羊を捧げましょう。この過てる子羊を』

しかし生徒たちが言い終わらないうちに、かぶさるようにどこかから別の声が聞こえる。

『悪しき者は裁きに耐えない。あの方は生きておられる』

言い終わると同時に床が割れる。割れ目から白い光が噴き出す。僕にまとわりついていた鐘が砕け散り、僕は吹きとばされて昇降口に転がる。生徒たちから動揺のざわめきがもれる。どうやら奴らにも想定外のことだったらしい。

すべてが光に呑みこまれる。

○

悪魔が来りて笛を吹く。

○

二年前（三年前だろうか？）くらいからハーメルンにはたくさんの笛吹き男たちが集められて

いる。対立している二つのグループが笛吹き男たちを集めているのだ。対立グループ同士の笛吹き男たちがあいまみえると、互いに相手方の笛吹き男を夢の国に送り込もうと笛を吹く。だいたいの場合はどちらかの笛吹き団が相手方の陣地へ攻めていく。笛吹き男たちの大集団が集まって、みんながみんな、銀色の笛を相手に負けないように吹き鳴らすわけだから、それは見るも無残なものになる。

もちろんその三年（四年？）の間にはずいぶんたくさんの笛吹き男が夢の国に送られてしまったわけだが、そんなことは味方の笛吹き男ですらたいして気にしない。ただ自分たちの笛の音が弱まることを恐れ、代わりの笛吹き男がたくさんやってくることを祈るだけだ。

状況は悪化の一途をたどっており、終わりの見えない泥沼状態だ。どうすればこの騒ぎが終わるのか、誰にも分からない。たぶん五年前にこの笛吹き騒ぎが始まったときは何かの理由があったはずだ。今もあるのかもしれない。でも笛吹き男たちはその理由を覚えていない。たぶん知らされてもいないのだと思う。笛吹き男という職業は、命令の意味を知る必要はない。ただ命令に従って、夢の国へ送り送られるのが笛吹き男たちの役割だ。

もちろんときには笛吹き男たちも疑問を持つ。笛を吹き鳴らしている間は頭を空っぽにしているのだが、どちらかの笛吹き団が退いて騒ぎが小休止となると、陣地に集まった笛吹き男たちはときに愚痴を言う。まだ終わらないのか。国に家族を残しているんだ。あいつらもさっさと諦めてくれればいいのに。

ごくまれに、我々は笛吹き男である前に人間だ、であるとか、夢の国いきたくねえ、などといった言葉も聞こえるが、だれも反応しない。六年の間にそんな愚痴には誰も耳を貸さなくなっているのだ。

そのとき、上空を飛行するヘリコプターが発見される。陣地で語らっていた彼らはあわてて笛を取り出したが、もちろんヘリコプターに乗った笛吹き男たちの方が笛を吹き始めるのは早い。

新たな惨劇の幕が上がる。ただし今度は一方的な展開だ。陣地に笛の音が鳴り響く。地上では逃げ遅れた笛吹き男たちが一斉に夢の国へと消える。

わたしはテレビのスイッチを切る。

○

氷河鼠の毛皮。

○

どこまでも青いなかを、まっすぐに飛んでゆく。それはしかし、かなり難しい。いま飛んでいるあたりに乱気流が発生しているのだ。それでもそれが生きることだから、まっすぐに飛ぶ。

どこまでも青いなかを、まっすぐに突き進む。幸い周囲には敵もいないし、不幸にして獲物もいない。だから彼方の青を目指して、飛ぶ。それにしても三六〇度、こんなに青く見えるのに、どんなに飛んでも自分がいる場所は透明なんだよな。ふと疑問に思う。一生飛んだところで、あの彼方の青い場所にはたどりつけないのだろうか。

そのとき腹に衝撃が走った。何が起きたのか把握できなかったが、垂直に落下し始めたところで、ああ、と観念する。何にやられたのだろう。かすむ目を懸命にこらすと、地上に立つ人間が見えた。何匹かいる。そのうちの一匹、毛皮を羽織った奴が、黒い筒をもった腕を突き上げて

、喜色満面で仲間に向ってなにやらわめいていた。

あとがき

この作品は、「たおれているその人々に」というテーマでつくられた四つの小話からなっています（なお、このテーマは中井英夫『虚無への供物』の献辞に端を発しています）。
また、小題は小説（戯曲ふくむ）の題名からとられていますが、深い意味はありません。

部誌のおわりに

部誌のおわりに

　これで本部誌は終わりです。いかがだったでしょうか。面白かったと思っていただけたら幸いです。
さて、文藝部は今年、部員の全員が中学生になりました。そして、文化祭でいつも使っていた化学講義室も、ほかの団体が使うことになり、使えなくなりました。例年と違う状況下で中学生だけで展示を作り上げていくむずかしさを感じました。
そして、文化祭に協力してくださった顧問の先生方、他文藝部員、そして何より本誌を手に取っていただいた方々に感謝いたします。ありがとうございました。

ｂａｍｂｏｏ（展示担当）

2012年10月11日
発行者・発行所　筑波大学駒場中・高等学校文藝部
印刷所　筑波大学駒場中・高等学校印刷室